

よ。」

オリューニンは顔をしかめた。ビエレッキイはそれに氣付いて媚びるやうな笑ひ方をした。「いや、全くさ。」と彼は云つた。「君はあの女と一緒に住んで居る、そしてあの女はあんな素的な女だ、あんな美しい女だ！ 完全な美人だ。」

「驚くべき美人だ！ 僕は今迄あんな女を見た事はないよ。」とオリューニンは云つた。

「それ見たまへ、それだのに何うして何うもないんだね。」とビエレッキイは事情がどんな風になつて居るかも知らずに、かう云つた。

「恐らくそれは妙かも知れん。」とオリューニンは答へた。「けれど何故僕は自分の感じを有りのまゝに語つちやいけないのだらう。僕が此所で住むやうになつてからは、女と云ふものが僕のために存在しなくなつたらしいんだ。そして、實際僕はそんなに自由でもあり良くもあるのを感じて居るのだ。本常にさうなんだ。それに一體、吾々と女との間に何の共通點があるんだね。イエローシユカは又別だ。あの老爺と僕との間には共通の情熱があるんだ——獵つて奴がねえ。」

「そりや聞き度いもんだ！ 何の共通なんだよ。僕とアマリア・イワノウナの間に何の共通なんだよ。やつぱり同じことさ。君は、此所の女たちは清潔でないと云ふかも知れない、そりや僕も承認する、だが *La Guerre, comme à la Guerre* だよ。(来るがまゝ、なるがまゝ。)

「僕は君のアマリア・イワノウナの家のものは知らないし、又、彼等とうまく合せて行くことも出来ないと思ふ。」とオリューニンは答へた。「僕はそれ等の人を尊敬することは出来ないだらう、けれどこの娘は僕は尊敬するね。」

「尊敬するなら勝手にするがいゝさ、誰もとめやしないよ。」

オリューニンは答へなかつた。彼は明に彼が今云ひ初めた事を云ひ盡してしまひ度かつたのだ。それが餘りに重い重荷として彼のうちに横はつて居たのだ。

「僕が例外であるのは僕も知つて居る。」と彼は極端に昂奮して又云ひ初めた。「しかし僕の生活は僕の主義を變へる必要を見なかつたばかりでなく、若し君の様な風に生活したならば、こゝで住んで行く事が——今僕が生きて居る様に幸福にとは云はないが——全然出来ない様に出來て居るんだ。のみならず僕は彼等の中に、君が見て居るとは全く違つたものを覓め且つ見出して居るんだよ。」

ビエレッキイはオリューニンの云ふ事が解らないと云つた風に眉をあげた。

「まあ、それは何うだつていゝよ。今晚僕のところへ來給へ。アマリアも來るだらう。僕が引き合せてやるよ。ね、來て呉れたまへ。若しいやだつたら歸るさ。來る？」

「行つてもいゝよ。けれど本當を云ふと、僕は又脱線することを嚴肅に恐れて居るんだよ。」

「おゝ、おゝ、おゝ」とビエレッキイは叫んだ。「兎に角來給へ、君のためにならぬ事はしないよ。」

来るね？ 屹度だよ！

「行くよ。だが、本當に僕は、そこで何うしたらいいか知らないんだ。どんな役割を演じなきゃならないんだね。」

「ちや、何うぞね。いゝかね。」

「あゝ、行かう、大抵行かう。」とオリエーニンは云つた。

「兎に角さ、何處でだつて見出されない様な恍惚たる美人の居るところでさ、君は修道僧の様に生きてるんだ。何の樂しみがあるんだね、そんな事して居て。何うして君は自分の生活を臺なしにしてそこに在るものを樂しまふとはしないんだね。君は吾々の中隊がヲズ井ゼンスカヤに行かうつてして居るのを知つて居るかね。」

「本當かね？ 何でも八中隊が出るんだとか云つてる様だつたが。」とオリエーニンは云つた。

「いや、僕は副官から手紙をもらつたんだ。その手紙によると、公爵自身が今度の戦役に出陣するらしいんだ。僕は彼に會へるんで喜んで居るんだ。僕はもう段々こゝが厭になりかけて居るんでね。」

「間もなく遠征があるつて云ふ話ぢやないか。」

「そりや聞かないかね。クリノ井ツインがこの前の戦役で聖アンナ勳章をもらつたつて事をきいたよ。彼奴、大尉になれると思つてたんだがなあ。」とビエレッキイは笑ひながら云つた。「で、彼奴がつ

かりしてな、本部へ行つたさうだよ。」

だん／＼と暗くなつて來るとオリエーニンの考へはこの夜會の方に向いて行つた。招待は彼を惱ました。彼は行きたかつたが、そこでどんな事が起るだらうと云ふ考へは幾分彼を恐れさせた。彼は、一人の男のカザックも年老つた女も、娘の外誰も其處には居ないと云ふ事を知つて居た、どうなる事だらう、どんな風にしたらいゝだらう、なにを云はうか、皆はどんな事を話すだらうか、これ等の野育ちのカザックの娘と彼との間に、どんな關係が起り得るだらうか。ビエレッキイは妙な皮肉な、それで居て全く固苦しい關係を説明して行つた。彼は、マリアンカと同じ室に居て互に話し合ふ事が出來ると云ふ考へに身慄ひした。彼女の傲慢な様子を思ひ出すと、そんな事が全く有り得ない事の様には思はれた。ビエレッキイはこんな事は何でも無い事だと云つて居たがそれは兎も角、どんな風に彼はマリアンカに持ちかけて行くだらう。「兎に角行つて、見て來てやるのも面白いだらう。」とオリエーニンは考へた。

「いや／＼、だが俺は行かない方がいゝ。それは悪い事であり、臆病である。のみならず何の目的もそこにはありやしない。」けれども又彼は、それが一體どんなんだらうと云ふ考へに惱まされた。そして又、約束に縛られる様にも見えた。終に彼は、はつきりと決心がつかない中に出掛けた。併しビエレッキイの宿につくと其内にはいつて行つた。ビエレッキイの住んで居たカザックの小屋は、恰

度オリエーニンの小屋の様なものだつた。それは地面から殆ど一ヤード半許りの高さの柱の上に立つて居て二つの室からなつて居た。オリエーニンが険しい階段によつて這入つて行つた最初の望見は雁の綿毛の床や、毛氈や、蒲團や、枕や等が一杯に、カザック式に、壁に添ふて優雅に綺麗に積み重ねられてあつた。両側の壁には銅の鍋や什器などが懸けられて居た。腰掛の下には西瓜や葫蘆などがころがつて居た。

次の部屋には大きな竈と卓子と腰掛と舊信者の『偶像』とがあつた。こゝにビエレッツキイは彼の陣營床やトランクを置いて居た。武器は壁に懸けられた毛氈の上にかけてられ、化粧道具や肖像畫などが卓子の上に散らかつてをり、絹の寝間着が腰掛の上に投げられてあつた。そしてビエレッツキイ自身は、さつぱりと綺麗になつて、襯衣にズボンを穿いたまゝ、デューマの『三人の銃卒』を読んで居た。

オリエーニンを見ると、彼は跳び上つて叫んだ。

「見給へ、うまく設備が出来てるだらう。まあ、兎に角君が来て呉れて嬉しいよ。みんなはもう大車輪で働いて居るよ。君は先生等のピログ（饅頭の類）の拵へ方を知つてるかね。捏粉に豚と乾葡萄とを混ぜるんだよ。だが、そんな事あ何うでもいゝ。見給へ、先生達どんなに昂奮してるか。」

實際、窓から覗いて見ると、主婦の小舎の中で、常ならぬ騒ぎが初まつて居た。娘たちは手ん手で何かを持つては、出たり這入つたりして居た。

「もう直きかね。」とビエレッツキイは叫んだ。

「直きだよ。もうお腹が空いたの？ お爺さん。」そして高い笑ひ聲が小舎の中にきこえた。

美しい、血色のいゝ、丸く肥つたウステンカが、袖をまくり上げたまゝ、皿をとりビエレッツキイの部屋にやつて来た。

「これッ、氣をお附けよ、皿が壊れるぢやないの。」と彼女は不意に叫んだ。そして「あんた来て手傳はなきやいけないわ。」とオリエーニンに笑ひかけながら云つた。「そして娘達にザクスキイを買つてやつて頂戴。」ザクスキイとは菓子と糖菓とのことであつた。

「マリアンカは来たか？」とビエレッツキイは訊いた。

「勿論よ。捏粉をもつて来たわ。」

「何う思ふね君は。」とビエレッツキイは彼の友に云つた。「若し此娘に晴衣を着せて、磨きたてゝ、少し飾つてやるなら故國のどんな美人よりも美しくならうぢやないか。君はあの大佐に嫁入つたカザック女のボルシチェーワを見た事があるかね。中々多分の威厳を備へて居てね、實に美しいよ。何處で一體それを得たのか僕には……。」

「僕は見事がないが、僕の考へぢや服装より綺麗にするものなあないな。」

「あゝ。」とビエレッツキイは喜ばし氣に溜息しながら云つた。「僕はどんな種類の生活にも調和してゆ

く能力をもつて居るんだ。どれ、奴等が何をして居るか見て来てやらう。」
かう云つて彼は、寝間着を引つけて駈け出して行つた。そして「君、ザクスキイを買ひにやり給へよ。」と振り返つて云つた。

オリエーニンは菓子と蜜とを買ひに彼の友達の従卒を遣つた。けれどお金を従卒の手に渡した時、不意に彼は、さながらこれで誰かを買つて居る様な気がして、悪い事をして居る様に思つた。で、彼は、この老兵卒から、どれ位の菓子と蜜とを買つて来るかときかれた時に、はつきりした答へをする事が出来なかつた。

「どれ丈けでも。」と彼は答へた。

「みんな買ふんですか。」と老兵士は訊いた。「薑餅は高かう御座んすよ。」

「みんな買ふんだく。」とオリエーニンは云つて窓の側に坐つたが、何か重大な、そして悪い事が起らうとして居る時の様にでも、心臓が馬鹿に速く打つて居るのに驚いた。彼は、今一つの部屋がビエレッキイが行つてから、急に叫んだり、騒いだり、出したのを聞いた。そして数分間の後には、その叫びや笑ひ聲の間から、ビエレッキイが跳び出して、階段を駆け下りるのを見た。

「奴等、僕を追ひ出すんだ。」と彼は云つた。

それから間もなく、ウステンカはまたビエレッキイの部屋に這入つて来て、用意がすっかり出来た

と取りすました態度で、若い人々を招待した。

そこで、彼等が小舎の中に行つて見ると、實際もう何もかも準備が出来て居た。そしてウステンカは壁に沿うて座蒲團を並べて居た。小さなナブキンで一部分だけ覆はれて居る卓子の上には葡萄酒の壺と乾魚とが置かれてあつた。饅頭と乾葡萄酒の匂がブン／＼して居た。晴着を着飾り、常々のやうに頭巾を捲かずに頭を露出した六人の娘が、叫びたり、クス／＼笑つたり大聲で笑つたりしながら壺の後ろの隅の方に塊まつて居た。

「私の守護天使に榮あれ。」とウステンカは食卓に客を招待しながら云つた。

どれもこれも例外なく美しい娘達の群の間に、オリエーニンはマリアナを探した。そして彼は、かうした状態のもとで彼女と會ふのが悲しく且つ腹立たしかつた。自分の愚鈍で無様な事を感じたので、彼はたゞビエレッキイのするやうにしようとして決心した。ビエレッキイは幾らか嚴かに、しかし全く落着いた悠然とした態度で、食卓の側に行き、ウステンカの健康のために一杯の葡萄酒を飲んだ。そして同じ事をするやうに他のものをも招いた。ウステンカはしかし、娘たちが飲まないことを斷つた。

「でも、蜜と一緒に少しはいけるわ。」と群のうちの者が云つた。

ビエレッキイは、丁度今、蜜と糖菓とを買つて店から歸つて来た僕を呼び入れた。羨望の心からか、侮蔑の念からか、彼の老兵士は、彼の謂ゆる無駄費ひをして居る上官達を横眼で眺めて、一塊の蜂巢

と灰色の紙に包んだ菓子とを恭々しく渡しながら、買物の値段をクドクと数へたて初めたが、ビエレットキイはそれを追ひ出した。

蜂蜜を葡萄酒に混ぜて盃に注ぎ、三ポンドの薑餅を食卓の上にぶち撒いてから、ビエレットキイは隅つこに居た娘たちを力づくで引つ張り出しては食卓に就かせ、それからみんなにその甘いものを分配し初めた。

オリエーニンの眼は自づと、日にやけた小さな手で二つの菓子を掴んだ事は掴んだが、何うしたらいか解らんと云つた風にして居るマリアンカに向けられた。ウステンカとビエレットキイによつて示された自由さと、座を陽気にしようとする努力にも拘らず、話は何となく固くなつて愉快どころではなかつた。オリエーニンはそはくとして落着けなかつた。何か云はうと思つて頭をしほつた。そして、自分がみんなに好奇心で、見られて居るのだと云ふこと、多分からかひ氣味で見られて居るのだと云ふこと、のみならず自分の氣兼ねを他人にも傳してしまつたのだと云ふことを知つて、彼は顔を赧くした。そしてこれは特に、マリアンカに氣まづい思ひをさせた様な氣がした。

「奴等は金を呉れるのを待つて居るのかも知れない。」と彼は心の中で思つた。「何麼風にして遣つたものか知ら。何麼風にすれば出来るだけ早く遣つといて歸れるか知ら。」

二五

「何故お前はお前ところの下宿人と近づきにならないんだ。」と不意にビエレットキイはマリアンカの方に向きなほつて云つた。

「家の方へちよつとも遣つて來ないんだもの、知己になれつこ無いわ。」とマリアンカはオリエーニンの方にちらと眼をやりながら答へた。

オリエーニンはそれに驚いて顔を赧めながらマゴクとして答へた。

「僕はお前のおつ母さんが恐いんだよ、初めて着いた時、直ぐ僕をひどく吐るんだもの。」

マリアンカは噴き出した。そして、

「そんなにおつかなかつたの？」と云ひながら彼を見たが、直きに又、よそを向いてしまつた。

オリエーニンがこの美人の顔をそつくり見たのは是れが初めてであつた。これまではたゞ、眼のところまで頭巾で蔽はれた彼女を見たばかりであつた。彼女が村一番の美人と噂されて居るのは道理のない事ではなかつた。成程、ウステンカは慥かに可愛らしい小娘であつた。脊の低い、圓顔の、薔薇色の頬をした、快活な鳶色の眼を持つた、赤い唇に絶えず微笑を浮べて居る、そして何時も笑つたり喋つたりして居る女だつた。けれど、マリアンカは音に可愛いばかりでなく立派であつた。彼女の容姿

はどちらかと云へば少し男性的で、無骨過ぎる様に思はれるかも知れない。けれど、それはそのよく調和のとれた体格だとか、力強い胸や肩だとかによる事であり、ことに黒い眉毛の蔭から輝いて居る、あの長く黒い眼の、きつくはあるが愛情に充ちた表情だとか、その口や、微笑の人懐っこい表情によるのであつた。彼女は滅多には笑はない、けれど又そのために却つて、笑つた時には何時も驚くべきものであつた。彼女の全存在は實に、處女らしい力と健康とでもつて燃えて居た。

娘達は皆美しかつた。けれど彼等ですへ、ビレットキイや菓子を持つて来た老兵士なごと同じ様に、我知らずマリアナを眺め、それから他のものゝ方に向いては復た彼女を見かへすのであつた。

彼女は實に、他の娘たちの間に在つて、傲然と落ち着きはらつて居る女王のやうに見えた。

ビレットキイはこの宴會を成功させようとして、ひつきりなしに喋つたり、娘たちに酒を飲んでまはせと云つたり、冗談を云ひかけたしたりした。そして、絶えずオリエーニンに、マリアナの美しいことを佛蘭西語で、露骨に話しながら、マリアナを「君の女』—*La votre*—と呼び、そしてオリエーニンにも彼に倣つてやれと責めたてた。

けれどオリエーニンは益々そのやりきれない事を見出した。

彼が何かいゝ口實を見つけ出して此場を逃げ出そうと考へて居ると、ビレットキイは、みんなはウステンカの名づけ日を祝つて居るのだから、ウステンカは接吻をして酒をまはさねばならぬと云ひ出

した。彼女は同意した。けれど、それは、結婚式の時の習慣のやうに、彼の板盆の上に金をのせて呉れねばならぬと云ふ條件の下にであつた。

「糞ッ！ こんな忌々しいところへなど飛び込んで来あがつて！」とオリエーニンは自分に云ひながら、こゝを去るつもりで立ち上つた。

「何處へ行くんだね。」

「煙草を買ひに行くんだ。」と云つて驅け出さうとしたが、ビレットキイは彼の腕を捕へて引きとめた。

「金は僕がもつて居るよ。」と彼は佛蘭西語で云つた。

「俺は行くわけには行かぬ。俺は拂はにやならぬ。」とオリエーニンは考へた。そして自分の分別の拙さに腹を立てた。

「ビレットキイのする通りに俺が出来ないと云ふ事があるものか。俺は此所に来てはならなかつたのだが、しかし来た限りには他人の樂しみを損ふ権利はない筈だ。カザック式に飲まにやならぬ。」そこで彼はチャブラ(木の盃、八杯位の量は入る。)をとつて、葡萄酒を注ぎ、殆んどみな飲み乾してしまつた。彼が飲んで居る間、女たちは驚いて、殆んど恐れながら眺めて居た。彼等にはそれが不思議にも見え亂暴にも見えたのである。ウステンカはも一杯注いで持つて来て、彼とビレットキイの何れに

も接吻をした。

『さあ、みんな、愉快に遊べるよ。』と云ひながら、ウステンカは盃の上に置かれた四モネタの金をガチャ／＼云はせた。

オリエーニンはもう少しの氣兼ねも感じなかつた。彼の舌は解き放たれた。

『さあ、マリアンカ、接吻をして盃をまはすのはお前の番だ。』とビエレッキイは彼女の手を取つて云つた。

『かうして接吻してやるわ。』とマリアンカは云つて、彼の耳を撲つ眞似をした。

『お金なんか貰はなくつたつて小さなお爺さんに接吻してやつてもいゝわ、お前さん。』と他の娘が口を入れた。

『さかしい娘だ!』とビエレッキイは叫んで、その娘を捕へ、逃げようとしてもがいて居るのを無理に接吻した。

『これッ、お前何うしても酒をまはさにやらんよ。』とビエレッキイは、マリアカンのところへ歸つて来て言ひ張つた。『お前の下宿人にまはすんだ。』

そして彼女の手を掴んでオリエーニンの坐つて居る腰掛のところへ連れて行つて、その側に坐らせた。

『御覽! 何てえ美しい娘だ。』かう云つて彼は、横顔を見せるやうに女の顔をまはした。

マリアンカは何の抵抗もしなかつた。たゞ尊大に微笑みながら、長い眼からオリエーニンを眺めた。

『全く美人だ!』とビエレッキイは繰返した。

『私がどんなに美しいか、御覽!』とマリアナの眼も云つて居る様に見えた。

オリエーニンはもう、自分が何をして居るかも知らないで、腕をマリアナに投げかけて、彼女に接吻しようとした。するとマリアナは急に身を振りちぎつて卓子の覆ひを引き落とし、ビエレッキイに衝つかりさうにしながら、竈の後ろへと驅け込んで行つた。叫喚の聲と笑ひの聲とが起つた。ビエレッキイは何か娘たちに囁いた。するとみんなバタ／＼室から入口の外へ驅け出して行つて、戸をしめた。

『何故お前はビエレッキイに接吻して僕にはしたがないんだ。』とオリエーニンは訊いた。

『し度くないからよ、たゞそればかりの事。』と下唇をひき上げて顔をしかめながら彼女は云つた。

そして『あの人は小さなお爺さんだから。』と微笑みながら附けたした。彼女は戸口に行つた。そしてそれをたゞき初めた。『何で戸を閉めたんだね、畜生奴。』

『まあ、彼奴等をあつちに放つとけばいゝぢやないか、そして吾々はこゝに居よう。』とオリエーニンは、彼女の側に寄り添ひながら云つた。

彼女はまた顔をしかめた。そして甚く彼を突きつけた。するとまた彼女がオリエーニンにはすばら

しく立派に見えて来て、彼を本氣に歸らせた。彼は自分のして居ることに耻を感じたので、戸口のところに行つて、それを引き開けようと試みた。

『ビュレキツイ、戸を開けろよ。何うして此麼くだらん戯するんだ。』

マリアナはまた失笑して、活々とした幸福な笑ひに陥つた。『あら！ あんたは私が怖いのか？』と彼女は云つた。

『さうだよ。お前はお前のおつ母さんの様に意地が悪るいからね。』

『さうねえ、あんたが若し、もう少しイエローシユカと一緒に坐つて居たら、娘達はもつとあんたを好きになつてよ。』と彼女は皮肉に云つて、まともに彼の眼に見入りながら微笑んだ。

彼は何う答へていゝかわからなかつた。

『だが、僕がもしお前に會ひに行つたとしたら？』と彼は、突然のやうに云つた。

『そりや又別の事だわ、』と彼女は、頭を振りながら答へた。

その瞬間にビュレキイは戸を一押し押してそれを開けた。マリアナはその臂をオリエーニンの脚に打つつけた位の有様でオリエーニンから飛び離れた。

『俺の考へて居た事は、みんな下らん事だ。戀愛に關する思想も、自己否定も、ルカマシユカも。唯だ一の幸福がある。幸福な人間が是認されるのだ。』かう云つた考がオリエーニンの頭の中にきらめい

た。と同時に彼は自分でも驚いた程力強く、美しいマリアンカを腕に抱へて、その額頭や頬に接吻をした。娘は怒らなかつた。たゞ、思ひつきり大きな聲で笑つて、他の娘たちのところへ走つて行つた。これが此の宴會の終りであつた。ウステンカの母が仕事場から歸つて來た。そして此の老婦人は少女たちを吐つて家に歸らせてしまつた。

二六

『さうだ。』オリエーニンは足を家路に向けながら考へた。『俺の今しなきやならん事は、全く自分を解放してしまつて、此のカザック娘と馬鹿氣た戀に陥ることだ。』

彼はかう考へながら眠つた。けれどまた彼は、此の馬鹿氣た事は直き過ぎ去つて、またもとの生活に還るだらうと想像した。けれどももとの生活は還つて來なかつた。マリアンカと彼の關係は變つて居た。以前彼等を分け隔てゝ居た障壁はもう破られて居た。オリエーニンはもう、マリアンカと逢ふ度に挨拶を取りかはした。

旗手は家賃を集めに來た。そしてオリエーニンの金持である事と氣前のいゝ事を聞いて居たので、訪ねて來る様にと彼を招待した。

年とつた奥さんは、ベンチャラを云ひ、彼を款待した。そしてあの宴會の日から此方、オリエー

ニンは屢々宿の主婦のところへ行つては、夜遅くなるまで家の者と一緒に話し込んでしまふ様になつた。外見上、彼はやはり、今まで通りの村の生活を續けて居る様に見えるは居たが、しかし胸の底では、何もかも全く變り果てゝ居た。晝間は森で過したが、もう八時にもなつて暗くなつた時分には、一人でか、さうでなかつたらイエローシユカ小父と一緒に、主婦の家に行つた。家の者はもうすつかり彼に馴染んでしまつて、たまに彼の姿が見えないと、何うしたのだらうと怪しむ程になつた。

彼は彼の飲む酒に氣前よく拂つた。そして平靜な日を送つた。ワアニユシヤが彼に茶をもつて行く時、彼は竈の側の隅つこのところに坐つて居る。年寄りの奥さんは、彼が居ても構はず仕事をしつて行く。そして酒や茶を飲みながら、カザックの功業に就いて、隣人の噂などに就いて話し合つたり、ロシヤの事をオリエーニンが話して、家の者等が色々な事を訊いたりした。時には、彼は本を持つて行つて一人で讀む事もあつた。

マリアナは山羊のやうに足を引き上げながら竈の上か、燈火から非常に離れた隅つこのところに脚を組み合せて坐る。彼女は話の仲間には入らなかつたけれど、オリエーニンは、彼女の眼や顔を見たり、動作を見守つたり、種を噛み砕くのを聞いたりはしては、彼女がその全存在をもつて彼の話にきき入つて居るのだと云ふとを意識した。黙つて本を讀んで居る様な場合にでも彼女の居るのが感じられた。

時としては、彼女の眼が彼を瞞めて居る様に思はれる事があつた。そして彼女の燃ゆる瞳に打つつかる時には、彼は思はず黙り込んで彼女を瞞めるのであつた。すると彼女は直ぐとその眼をそらしてしまひ、彼は此の年寄りの奥さんとの話にすつかり黙り込んで居る様な風をしながら、彼女の呼吸や、あらゆる動作に耳を傾けつゝ、もう一度また彼女が彼を見かへすのを待つて居た。

他人の前では、大抵の場合、彼女は彼を快活な親しさをもつて待遇した。けれど人の居ないところでは粗野で亂暴だつた。時として彼は、マリアナがまだ街から歸つて来ないうちに行く事もあつたが、でも其時時には、急に彼女のしつかりした歩調や青いキャラコの襯衣の、開き戸の側で翻る音がきこえる。そして、部屋の中に這入つて来ると直ぐ、彼を見て、眼に包みきれぬ柔しさを示して微笑む。すると、恐怖と歡びとの混つた感情が彼を掴む。

彼は別に何者をも彼女に請ひもせず期待もしなかつた。けれど、日を追うに従つて益々多く、彼女の姿が彼の生活になくてはならぬものになつて来た。

此慶風にして、村の生活に馴れきつてしまつた彼には、その過去が全く縁遠い何かである様に見える、彼が今住んで居る此の小さな世界を離れては、將來が全く存在しないものゝ様に思はれた。家からや、親戚や友人から手紙が来ると、カザックの村に住んで居る彼を、癡れ者かなんかになつた様に云つては嘆いて来た。彼はそれが悲しかつた。何故なれば、彼こそ却つて、彼が今送つて居るやうな生活を

しないそれ等の人々を癡人のやうに見て居るのであつたからである。彼は今迄の生き方を振りきつて、自分の境遇を、村に於ける生活のやうに斯くも單純に斯くも儀式ばなれたものにする事を悔むべきでないと思ひ居た。戦陣に於ても、哨兵線に於ても、愉快であつた。しかし此所では、イエローシユカ小父の翼の下に於て、森の中に於て、村の端にある小舎に於て、特にマリアナとルカシユカのことを思ふ時に於て、あの以前の生活の、その當時でさへ心を亂され、今ではこの上もなく厭はしく且つ不條理のやうに思はれ出した、以前の生活の虚偽であつた事を完全に明瞭と了解し出したのであつた。日は日を追うて、益々自由になり、益々人間になる自分を彼は見出した。カウカサスは彼の夢想とは全く違つて居た。此處に来て彼は、カウカサスに就いて聞いたり讀んだりした幻影や描寫に似て居る者を爪の垢ほども見出さなかつた。

「此處には自分の想像して居た様な駿馬もなければ瀑布もない。アマラット・ベツクも居なければ、英雄も居ず、放浪者も居ない。」と彼は自分に云つた。「人々は自然をそつくり生活して居る。彼等は死ぬ、生れる、結婚する、また生れる、闘ふ、飲む、食ふ、歡樂をつくす、そして又死ぬ。太陽や、草や、動物や木やの上に自然そのものゝ加へた不變の條件の外には何等の條件もない。彼等はこれ以外の法則には決して服従しない……」

そして、それ故これ等の人民は、彼自身と比べて見ると、美しくて、強くて、自由である様に見えた。だから、彼は彼等を眺めた時、自分を耻かしく思ひ、悲しく思つた。

一切を抛棄して、カザツクの軍籍に入り、小舎と家畜とを買ひ、カザツク女と結婚し——たゞマリアナはいけない、マリアナはルカシユカのために思ひ切つて居るのだから——イエローシユカ小父と一緒に住んで、彼と一緒に獵に行き、又漁りに行き、そしてカザツクの間を離つて遠征に行かう、と云ふ考へが、折々眞面目に彼の頭の中に浮んで來た。

「何故俺はこれをしてはいけないんだ。」と彼は自分に訊いた。「俺は何を待ち望んで居るんだ。」かくて彼は自分を責め自分を嘲つた。

「事によつたら自分は、自分が合理的で正しい事だと思つて居る事を爲るのを恐れて居るのではあるまいか。單純なカザツクとなり、自然に接近して生活し、誰にも害を加へず、却つて人々に善を爲さうとする欲望は——これを爲さうと云ふ夢想は、自分が以前に夢想して居た事、たとへば、大臣にならうとか、聯隊の指揮官にならうと夢想してゐたことよりも、もつと馬鹿らしい事であらうか。」

けれど、或る聲が彼に、待て、急いで決定するぢやない、と告げて居る様に見えた。イエローシユカやルカシユカのやうな生活をそつくり送る事は不可能だ、何故なら俺は幸福に關する他の理想を持つて居るから、と云ふ込み入つた意識に彼は制せられて居た。又、幸福は自己否定のうちに存するものだ、と云ふ思想に制せられて居た。ルカシユカに對してする彼の行爲は彼を喜ばせる事を止めなかつた。

彼は絶えず、他人のために自己を犠牲にする機会を求めて居た。けれどその機会は来らなかつた。時々彼は、此の新発見の幸福の處方を忘れて、イエローシユカ小父のやうに、自由な生活をすればいいのだと感じる事がある、けれど、直きに又彼は、自己否定の思想を想ひ出してそれに膠着する。かくして遂に、静かに且つ傲然と、總ての人々、及び他の人々の幸福を眺めるのであつた。

二七

葡萄摘みの時期の來ない間に、ルカアシユカは馬に乗つてオリエーニンは會ひに來た。彼は平常よりはもつと勇敢なカザック姿をして居た。

「やあ、御機嫌よう。結婚は何うなつたね。」とオリエーニンは訊いて、親しげに挨拶した。

ルカアシユカはそれには答へなかつた。

「見なせえ！ 俺あお前さんの馬を河向ふの奴と取つかへましたよ。この馬でさあ。カバルダの一番いいタウロオ種だよ。俺の眼は高えからなあ。」

二人は此の新しい馬を眺めて、庭を歩くかせて見た。馬は實に驚く程立派だつた——廣くて長い栗毛の種馬、光澤のある皮膚、流れるやうな尻尾、しなやかな細い鬣、純血種の特長の肩骨間の隆起、ルカアシユカの云つた様に、これならその背の上で眠つたつていい位肥えて居た。その蹄と云ひ、眼と

云ひ、齒と云ひ、何から何まで目ざましい程立派で、純血種の馬だと云ふことを明白に示して居た。オリエーニンは此の馬を讃嘆せずには居られなかつた。彼は、カウカサスぢゆうで此處に美しい馬を見た事はなかつた。

「それに脚が早いやね。」とルカアシユカは馬の頸を撫でながら云つた。「いゝ歩るき振りだよ。そして精巧でな。主人の後を追つて來るつて奴さ。」

「追金を澤山出したかね。」とオリエーニンは訊いた。

「いや、勘定は拂はなかつたよ。」とルカアシユカは微笑みながら答へた。「俺あこれを客友のところで換へたんだ。」

「これは驚く程美しい馬だ！ どの位なら賣るね。」とオリエーニンは訊いた。

「百五十モネタ位の値打ちはあるね、だけどお前さん取つときなせえ、こりやお前さんのでさあ。」とルカアシユカは喜ばしげに叫んだ。「たつた一言さう云やあ、お前さんのものよ。鞍をとつて追ひ込みなせえ、お前さんの役に立つ機会を俺にも下さつしやい。」

「いや、そんな事があつても。」

「あゝ、それぢや茲に、お前さんに持つて來てやつた物、——俺等の言葉で云や、ベシケツシユカあらあ。」と、ルカアシユカは自分の帯を解いて、帯輪に懸つて居た一口の短劍を引き出した。「俺やこれ

を河向うで手に入れたよ。」

『それは有りがたい。』

『それから阿母がお前さんに葡萄酒を持って来るつて云つてたよ。』

『そんな事しない方がいゝんだよ。何時かまたお禮をしてもらふ時があるもんだよ。僕は別に此の短劍の御禮をしないんだからね。』

『そんな事してたまるもんかね、俺等はクーナク(客友)だからなあ。ギレイ・ハンが河向うの小舎に俺を招んで言つたんだ。』とれなと撰り取るがえ。」つてなあ。そこで俺あ此の劍を取つたんだ。これが俺等の習慣でさあ。』

二人は小舎の中に這入つてお互の健康のために飲んだ。

『今度は暫く滞在つて居られるのかね。』とオリエーニンは訊いた。

『いや、俺あ別れを云ひに来たよ。俺あ今度、哨兵線からテレクの河向うの小邑に移される事になつたでな、今日、仲間のナザアルカと一緒に出かけるところだよ。』

『ぢや、結婚は何時やるんだね。』

『俺あ直き歸つて来るだよ、すると、萬事がうまく運んで、俺あ又、勤めに還つて行くだよ。』とルカアシュカは嫌々ながら答へた。

『で、お前は花嫁に會ひに行かないのかね。』

『そんな必要があるもんかね。彼の女に會はなきやならん譯があるかね。遠征に来たら小邑で背廣のルカアシュカつて訊いてお呉んなせえ。あそこにや野猪も居るしなあ！俺あ二匹やつつけましたぜ。獵に連れてかうよ。』

『ぢや、左様なら、御機嫌よう。』

ルカアシュカは馬に跳び乗つて、マリアナに會ひにも行かず、ジギット風に往來の方へ乗つて行つた。そこにはもう、ナザアルカが彼を待つて居た。

『なあ、おい、寄らねえのか。』とナザアルカはヤアムカの住んで居る方に向けて眼を瞬きしながら訊いた。

『さうだなあ！』とルカアシュカは叫んだ。『お前、俺の馬つれて行つて、呉れねえか、でなあ。若し俺が少し暇どつたら乾草やつといて呉んな、朝までに俺、テレクの向ふの小邑に行つて居ねえぢやなんねえ。』

『おい、見習士官の奴、もう何にも呉れねえだつたか。』

『中々何うして！俺あお禮に劍もつて行つてやつたんだがね、その時でせえ、馬を返せつて云ひかけるとこだつたよ。』とルカアシュカは馬から降りて、手綱をナザアルカに渡しながら云つた。

彼はオリエーニンの小舎の窓の真下から庭にくぐり込み、マリヤナの小舎の窓もとまで這つて行つた。今はもう全く暗かつた。若い娘は、襦袢の外何も着ずに髪を梳きながら寝る仕度をして居た。「俺だよ。」とカザックは囁いた。

マリヤナの嚴な顔は、平氣な表情をして居たが、自分の名の呼ばれるのをきくと、急に生々として來た。恐れと喜びとに充たされながら、彼女は、窓框をあけて頭を突き出した。

「何だね、何の用だね。」と彼女はきいた。

「戸を開けろよ。」とルカアシュカは要求した。ほんのちよつとの間でいゝから入れて呉れ、お前が居ねえんで俺あ寂しかつたよ。やりきれなかつたよ。」

彼は女の顔を引き寄せて接吻をした。

「ほんとに入れて呉れろよ。」

「馬鹿々々しい！ 入れないつて云つて置いたぢやないか、長いこと居るの？」

彼はたゞ接吻で答へた。彼女も亦それ以上きかなかつた。

「おい、窓越しに抱くなんて拙いぢやねえか。」とルカアシュカは呟いた。

「マリアマウシュカ」と老夫人の聲が叫んだ。「誰が來てるんだへ？」

ルカアシュカは見つけられない様に帽子をとつて、窓の下に蹲居んだ。

「早く行きな。」と娘は囁いた。

「ルカアシュカが來たの。」と娘は母の問ひに答へて云つた。「お父さんに逢ひたかつたのだつて。」

「いつちへ寄越しな。」

「もう行つちやつたわ、時間がななんだつて。」

實際ルカアシュカは蹲居んだまゝ、早足で、窓の下を大急ぎで通つて、中庭を横切り、ヤアマカの方へと歩いて行つたのだつた。それを見たのはオリエーニンばかりであつた。

赤葡萄酒を木製の大杯で二杯飲んでから、彼とナザアルカとは哨兵線の方へ乗り去つた。その夜は温かく又暗くて静かだつた。彼等は黙つたまゝ馬をすゝめた。きこゆる物音としては、たゞ馬の蹄の響きであつた。ルカアシュカはカザック・ミンガルの歌を歌ひ出したが、その一節も終らないうちに止めてナザアルカに向つて云つた。

「なあおい、彼奴俺を入れあがらなかつたよ。」と彼は云つた。

「うん！」とナザアルカは叫んだ。「俺あ、彼奴入れねえだらうと思つてた。ヤアマカの話しぢや、見習士官が何時も入りびたりださうだよ。イエローシュカ小父は、マリヤナを彼奴に世話して鐵砲もらふんだつて吹いてるさうだよ。」

「彼奴の嘘つき奴！ 畜生！」とルカアシュカは腹立たし氣に云つた。「老いほれ畜生の肋骨ぶち折つ

てやらうぞ。』もう一度彼は好きな歌をうたひ出した。

イズマイロフの小村から

貴婦人の美しいお庭から

鋭眼の鷹がすーつと飛んで出た。

若い獵人、庭から馬で追つかけて

鋭眼の鷹を手で呼んだ。けれど

鋭眼の鷹は答へて云うた。

『金色のお籠も俺よとめられぬ

お手にとまるももういやぢや

これから俺は遠い蒼海へ

そこで白鳥を殺して樂しもう。

美味い白鳥わしや好きぢや。

二八

旗手とウリトカ奥さんは婚約を祝して居た。ルカフシカは村に歸つて來たけれどオリエーニンを訪

ねては來なかつた。オリエーニンも招かれては居たがその祝の筈には連らなかつた。あの誕生日の宴會の日から此方、オリエーニンの胸がこんなに悲しい思ひをした事はなかつた。彼は、ルカフシカが取つて置きの晴着でその母と共に、夕刻前に旗手の家に這入つて行くのを見た。そして彼はまた、何故ルカフシカが彼にかくも冷淡になつたのだらうと云ふ疑問に苦しめられて居た。

オリエーニンは自分の小舎の中に籠居つて日記を書き初めた。

『自分は此頃になつてから多くの事を考へ多くの變化を経験した。』と彼は書き記した。『そして自分はやつと今、初等讀本に書かれて居る事に到着した事を見出した。幸福である爲めには、たゞ一事が必要である——即ち愛する事だ。自己犠牲の愛をもつて愛する事だ。一切の人、一切の者を愛する事だ、凡ゆる方向に愛の蜘蛛の巣を擴げる事だ、ぶつつかつた何人にでも愛を賦與する事だ。かくの如くにして自分はワアニエウシヤをもイエローシカをもルカフシカをもマリアンカをも我が者とした。』オリエーニンが丁度これを書いて居るところへイエローシカ小父がやつて來た。イエローシカは此上もない快活な氣分になつて居た。數日前の或る夕方、オリエーニンは、彼が自分の家の庭で、傲然として満足しきつた顔をしながら、小さな洋刀で野猪の皮を巧に剝いて居るのを見た事があつた。彼の犬どもは、その中には彼の好きなリヤムも居た。彼の側に寝そべつて、彼の顔を眺めては尾を振りくして居た。穿鑿好きの腕白ッ兒が五六人垣根から彼を見守つては居たが、何時ものからかひを

控へて居た。近隣の五六人の女たちが例の如くつか／＼とやつて来て、彼に挨拶をし、或者は赤葡萄の小さな壺を彼に與へ、或者は凝乳を、或者は粉菓子やを彼に與へた。

翌る朝は、イエローシユカは、血一ぱいに混みれて、自分の小舎の中に坐りながら、金や酒と引き換へに磅いくらで野猪を賣つて居た。彼の顔には、『有りがてえ仕合せだ。俺は猪を殺したよ、見ろ、此の老ほれ小父でも少しは役に立つぞよ。』と書いてあつた。その結果として、勿論彼は飲んだ、もう三日も村を離れずに飲みつづけて居る、その上に彼は婚約の宴會でも飲んで居た。

イエローシユカ小父は可なり酔つぱらつて旗手の小舎からやつて来た。赤い顔をし、髻をグシヤ／＼にもつれさせては居るが、金條で縁取りした新しい赤のベシユメットを着、テレクの河向うで手に入れたバラ、イカ、即ち三弦のギターを持つて居た。すつと前から彼は、此の娛樂をやつて聞かせる事を約束して居たのだが、今こそそれをやつて見る氣になつて居たのだつた……だが、オリエーニンが書いて居るのを見ると、彼は失望を感じた。

『書きなせえ、書きなせえ、お父つあん。』と彼は、何かの靈が彼と紙との間に坐つて居るとでも思つて居る様に、小聲で云つた。そして、それを邪魔しまいと云ふ考へから、爪先きで這ひながら、音も立てずに床の上に坐つた。これはイエローシユカが酔つて居る時に好くやる姿勢であつた。オリエーニンは彼を見上げたが、酒を用意する様に命じて置いて又書き初めた。一人で飲むのは老人にとつて

は退屈だつた。彼は話をし度い様な氣持ちになつた。

『俺あ婚約式に出て居たよ。だけど、あんな豚なんか關つて居られやしねえや。俺ああんなあ嫌えだ。だから俺あお前さまに會いに來たよ。』

『何處でバラ、イカを手に入れたね。』とオリエーニンはなほ書きつづけながら訊いた。

『河向ふへ行つてな、お父つあん、そこで此の樂器を手に入れたよ。』と彼は少し高い聲で云つた。

『俺あこいつを弾くのが上手えでな、韃靼の歌でも、カザックのでも、紳士のでも、兵隊のでも——何でも御好み次第てえ譯さ。』

オリエーニンはもう一度彼をちらと見て、微笑んだが、また書きつづけた。此の微笑は彼を勵ました。

『さあ、止めなせえ、お父つあん！止めなせえ。』と彼は急に思ひ切つて云つた。『彼奴等お前様に反對して居るだよ——うつちやつときなせえよ。睡はつかけてやんなせえよ、そら、何をお前さまはそんなに書いて書いて書きつづけるだね、そりや一體何ちゆうこつちやいね。』

そして彼は、オリエーニンを真似て、不格好な指で床の上を掻きながら、見つともない顔をゆがめて蔑しむやうな犂め面をした。『何でそんな呪文を書くだね、いつその事飲みなせえ、さうすりやお前様勇士になれるよ。』

彼の頭には、書くと云ふことは何か悪るい手品より外の事でないといふ考へしかなかつたのだ。オリエーニンはカラ／＼と心底から笑つた。するとイエローシカ小父も一緒に笑つた。彼は床からとび上つて、鞆の歌をうたつたり、バラ、イカを弾いたりする事の巧妙さを見せ初めた。「なんで書くだよ、お前さまは、それよりや聴く方がいゝやな、俺が歌つてやらから。若し死んだ日にやあ、こんな歌はきかれねえぞえ。さあ、一緒に飲むべえ。」

彼は自分で作つた歌を唄ひながら、踊りはじめた。

あゝー、デイ、デイ、デイ、デイ、デイ

俺等が奴に會つた時、奴あ何處に居た

あきなひ臺に身をかゝめ

ピンと衿止め賣つて居た。

それから彼はまた前の曹長から教はつた歌をうたつた。

俺は月曜に戀をして

火曜はいちんち溜息ついて

水曜に思ひを打ち明けた

木曜は返事を待つばかり

金曜にやつと遣つて来た

やれ、楽しい極樂あ來なかつた

そこで土曜日にや此のろくでなしの

命捨てようと思つて見たが

直きまた正氣が戻つて来て

日曜に俺は笑つたよ。

そして又折返しを歌ふ。

あゝ、デイ、デイ、デイ、デイ、デイ

俺等が奴に會つた時、奴あ何處に居た

それからまた目をしばたき肩をすくめ、ノロノロ歩るき廻りながら、歌った。

接吻をしてやる、抱いてやる

髪にリボン巻いてやる

ナデゼンカ、俺はお前をとめて置く

お前は俺の尊い望み

俺に惚れるか、これ、俺のいゝ婦。

かうして彼は非常に元氣になり、始終、樂器を鳴らしながら、まるで今一度若い勇士に還つて來でもしたやうに、部屋ぢゆう躍りまはつた。

デイディディの歌や、それに似た、彼の謂ゆる紳士の歌を、彼はたゞオリニーンのためにのみ歌つた、けれど、葡萄酒をもう三杯ほど飲んでから、彼の過ぎし日の事を想ひ出し、カザックや韃靼の純粹の歌の見本を歌つて見せた。そのうちでも、彼が特別に好いて居た者に來ると、バラ、イカの絃を掻き鳴らし続けながらも、彼の聲は急にとだへてやめてしまつた。

「あゝー お前さま！」と彼は叫んだ。

彼の聲の妙な響きがオリニーンの注意を惹いた。老人は泣いて居たのだ。涙が眼にたまり、一滴は頬を傳ふて居た。

「おゝー若かつた日よー お前はもう二度たあ歸つて來ねえだな。」と叫んで、イエローシユカは吸泣きをしたが、やがて又それをやめて、「飲みなせえ。何故お前さまは飲まねえだな。」と、涙を拭きもせず、凄じい聲で、不意に彼は叫んだ。

特に彼を動かした歌は、或る山の歌であつた、その言葉は少なかつたが、その魅力と云ふ魅力は實に、その憂鬱な折返しに在つた。

アイー！ ダイー！ ダラライー！

イエローシユカは此の歌の言葉を次の様に譯してきかせた。

「若者が彼の家畜の群を村から山に追うて居た。その後へロシア人がやつて來た。そして村を焼き、凡ての男を殺し、凡ての女を牢屋に入れた。青年は山から歸つて來た。村のあつたところは荒地になつてあつた。彼の母は居なかつた。彼の兄弟も居なかつた。彼の家は消えてなくなつて居た。たゞ一本の樹が立つて居た。青年はその樹の下に坐つて泣いた。『たゞ一人、お前のやうに俺はたゞ一人残された。』かくて青年は悲しみの歌を唄ひはじめた。アイー！ダイー！ダラライー！」と。

そして此の愁嘆を、腸を掻きむしる折返しを、幾度となく老人は繰返した。

此の歌を唄ひ終つてから、イエローシユカは突然壁にかけてあつた鐵砲を掴みおろしたかと思ふと、急ぎ中庭にかけ下りて行つて、一度に二弾も空中目がけて發射した。そして、今一度彼は、此の悲しい折返しのアイ！ダイ！ダラ、イーを聲高らかに歌つたが、再びまた押し黙つてしまつた。

オリエーニンは彼の後を追うて急ぎ立關まで出て行つて、射撃で輝いて居る暗い、星空を黙つて眺めた。旗手の家では、窓が開いて、人聲がきこえた。中庭の向ふや、立關や、窓の周圍には、女たちが集まつて居たり、酪乳場から入口に走つたりして居た。五六人のカザツクが戸口から飛び出して來て、自分達を制しきれずに荒つほい叫び聲を出し、そしてイエローシユカ小父の歌と發射とに答へた。

「なぜお前は婚約式に出て居ないんだね。」とオリエーニンは訊いた。

「彼奴等あ勝手にするがいよや、勝手にするがいよやー」と老人は、明かに何かに腹を立てゝ居るらしい風に答へた。「俺あ彼奴等あ好かねえだよ、好かねえだよ。あゝ、何てえ奴等だ！ さあ部屋へ入らうや。彼奴等あ彼奴等で勝手に飲むがえゝ、俺等は俺等で飲むべえや。」

オリエーニンは部屋に還つた。「うむ！ で、ルカアシユカは嬉しきうにしてるかね。何故彼奴僕に會ひに來ないんだらうねえ。」と彼は訊いた。

「ルカアシユカ？ 奴、だまされてるだよ、みんなが彼奴に、俺がお前さまにあの娘世話しようつて

してる様に云つたよ。」と彼は小聲でさゝやいた。「娘が何うだてえんだい。もし欲しけりやこつちの者よ、ちいつとばかし金をやつて見なせえ、彼女はこつちのものだよ。俺ああの娘をお前さまのものにしてやるよ。ほんとにさ。」

「いや、小父さん。金では何うにもなりやしない。あの娘が惚れて居なけりやね。その事はもう談ささないがいよよ。」

「お前さんと俺とは、あそこちや嫌はれもんだよ、俺等あ孤兒よ。」と不意にイエローシユカ小父は云つて、またボロ／＼と涙を流した。

老人の物語をきゝながら、オリエーニンは平常よりも餘計に飲んだ。

「でも、俺のルカアシユカは今喜んで居る。」と彼は自分に云つた。しかし彼の胸は曇つて居た。老人はその晩、床の上をノタクリ廻つた程、澤山に飲んだので、ワアニユシヤは彼を引きずり出すために五六人の兵隊の助けを借らねばならなかつた。彼は此の老人の行爲に非常に腹を立てゝ、バツと唾を吐いた。そして平常のやうに佛蘭西語で話すことも忘れてしまつた。

二九

八月が來た。幾日も／＼打つ／＼いて空には雲がなかつた。太陽は耐へきれない程照り輝き、砂丘や

道路からは燃ゆる砂の雲が起り、それが葦や木や村を越えて空中に捲きころがつた。草や木の葉は塵に掩はれた。道路や沼は乾いて固くなり、歩るけばカタンコトシと響きを立てた。テレクの水は涸れて久しく、溝は乾きよつて居た。家畜に踏みにぢられて沼のやうになつて居た村の近傍の池の縁はもう固く乾き初め、少年や少女の水いたづらや、叫び聲が、終日その水中にきかれた。曠野の方まで延びひろがつて居る沼の窪地に一ぱい生へて居る葦も萎え、牧場のぐるりには家畜が鳴きながら彷徨いた。野獸はもつと荒れはてた葦の原や、テレクの向ふの山地の森に引つ込んでしまひ、蝸や蚊の群は丘の上にも街の中にも飛びまはつた。雪を頂いた山々は灰色の霧に包まれ、空氣は稀薄で惡臭を放つた。

アブレク人が淺瀬になつた河を渡つて、此方側をうろついて居ると云ふ知らせがあつた。夕方ごとに、太陽は燃ゆる火の玉になつて沈んだ。

收穫時であつた。村の住民はみな、甜瓜畑や葡萄畑に群がり出た。園には華かな緑色の捲蔓が繁茂して、涼しい濃厚な影を一面におとして居た。廣い透明な葉の下には、至るところ、紫に熟つた、重い果實の房が垂れ下つて居た。果樹園に通じて居る埃、ほい道には、果實を一ぱいに積んだ二輪馬車がキイ／＼とところがつて行つた。その車の通つた跡の埃道には、此處其處に大きな房が、車から落ちて残されて居た。

小さな襦袢を葡萄の汁で汚して居る子供たちは、手に葡萄を持つたり、口に銜んだりしながら丹の後を追つかけて居る。途を歩いて居ると至るところで、葡萄で一ぱいになつて居る籠をその強い肩に擔いで居る襦袢を着た労働者に出逢ふ。頭巾で眼のところまで掩はれたママキ（それは娘たちの冗談に呼ばれる名）が、一ぱいに積んだ荷車を牡牛に牽かせて居る。兵隊たちは、彼等に逢ふと葡萄を強請む、すると娘たちは荷車の上に登つて行つて、兵隊たちの撒けた薪へこぼれる程掴んで投げる。

何處かの庭ではもう、葡萄酒搾りが初まつて居る。空氣は新酒の蒸りでブン／＼して居る。血のやうに赤く染まつた酒槽が小舎々々の下に見られる。ツボンをまくり上げ、脛を眞紅にしたノガイの労働者達が、方々の中庭のあたりに見える。豚はブー／＼鳴きながら葡萄の皮で肥え太つてゴロ／＼して居る。酪乳場の平つたい屋根は、太陽に干してある黒が／＼つた琥珀色の房で厚々と覆はれて居る。烏や鵲が屋根の周圍に集まつて、此處から其處へと飛びながら種子を盗んで居る。

一年間の労働の成果は樂しげに集められる。わけても今年の收穫は殊の外の豐作である。蔭の濃い緑の園には、此の葡萄の蔓の海の間に、樂しさうな女たちの笑聲や歌聲が、どつちの方面にもきこえる。そして女たちのケバ／＼しい色の着物が輝やく。

丁度正午に、マリアナは彼女の家の果樹園の桃の樹の下に居た。そして縛いでない小馬車から家族のものゝ晝餐をおろして居た。彼女の前には、地面に敷きひろけられた馬被の上に、學校から休暇を

とつて歸つて来る旗手が坐つて居た。そして水差から注がれる水で手を洗つて居た。丁度、池から歸つて来たばかりの小さなマリアンカの弟は、呼吸もせきく、袖で身體を拭きながら、書齋が待ちどほしいと云はぬばかりに、苛々と姉や母を眺めて居た。

老母は、頑丈な、日に焦けた手を素早く動かしながら、葡萄や乾魚や乾酪や麵麩を、小さな低い圓卓子の上に並べて居た。

旗手は、手を拭ひてから帽子をとり、十字をきつて、卓子の側に寄り添うた。少年は水差を取上げてグー／＼飲んだ。母と娘とは脚をピッタリ壓着けて卓子に向つて坐つた。樹蔭でさへ、たまらなく熱かつた。果樹園の周囲の空氣はあくどくて重苦しかつた。強烈な熱い風が枝と枝との間を掻きわけて通つては行くが、その翼の羽ばたきにも、苦痛を和けて呉れるものは少しもなく、たと單調に、果樹園に列をなして居る梨の樹や桃の樹や桑の樹の梢を揺り動かすばかりであつた。

旗手はまた祈禱を吹きながら、葡萄の葉でかくまはれて居た赤葡萄酒の壺を自分の後の方から取り出して、その口から飲んだ。そしてそれを彼の妻に渡した。旗手は襦袢一枚になつて居たが、頸のあたりのボタンをはずして居たので、その筋肉逞ましい毛深い肩が露はれて居た。彼の敏捷こい瘦せた顔はニコ／＼して居た。その動作にも話しつぶりにも、平常の滑るさうなところが少しも見えなかつた。彼はたと喜ばしさうに、のんびりとして居た。

「どうだね、夕方までにやしまへるだかね」と、彼は、濡れた口髭を拭ひながら訊いた。

「仕舞へるだらうよ。」と老夫人は答へた。「たと天氣さへ持ちこたへて呉れりやあねえ。デームキンのところやまだ半分しか收穫ねえだよ。」と彼女は附け加へた。「あそこの家ぢや、働くなあたどウステンカばかりだからね、あの娘は自分の身を費ひ殺す位だよ。」

「何だつてしようがあんめえ。」と老旗手は傲然として云つた。

「さあ、マリアンカ、一杯お飲み。」とウリトカ奥さんが云つて、娘に壺を渡した。「有りがてえ事だ。立派な結婚式を舉げる位は十分に收穫れるよ。」

「それにやまだ間があらあな。」と旗手は、幾分肩根を擡めながら云つた。
娘は頭を垂れた。

「まあ、なぜお前さんは其處にわけがわからないだね。」と老夫人は要求した。「する事あもう爲て居るだから、時あもう眼の前にやつて來て居るだに。」

「占師のやうな事を云ふなよ。」と旗手は云つた。「今は收穫時だよ。」

「お前さんルカアシユカの新しい馬見たかね。」と老夫人は訊いた。「彼はミトリイ・アンドレ・井チにもらつたのを持つてなかつたよ。取換つこしたんだよ。」

「いや、俺あ彼にや會はなかつた。だけど、今日俺は自宅の下宿人と話して來たどがね。」と旗手は

云つた。『又、何千ルーブリか受取つたやうだよ。』

『金持ちさ、それだけの事よ。』と老夫人は簡潔に云つた。家内ぢのうみなニコ／＼と満足して居た。

仕事は都合よく抄取つて居た。葡萄の收穫は彼等の當てにしたのよりは澤山もあり美しくもあつた。

マリアナは晝餐を食べてから、牡牛に草をやり、それからベシユメットを捲いて枕にして、小馬車の下のしなやかな、水々しい草の上に寝ころんだ。彼女の身につけて居るものとはたゞ、頭の上に一枚のソローチカ、即ち、絹の頭巾と、青いバサ／＼した襦袢とばかりであつた。けれど、それでもなほ、やりきれなく熱い様に見えた。彼女の顔は眞紅になり、手足はだるく、眼は重くて眠くて疲れ居た。彼女の唇は何時とはなしに離れ、胸は重い深い息で盛りあがつた。

收穫時が二週間ばかり續いて居たが、此の若い娘は全力をこめて、此の打續いての荒仕事に没頭して居た。彼女は、朝はやく、東の空のやつと白みかけた頃に跳び起きて、冷たい水で顔を洗ひ、頭巾を被り、跣足で家畜を追つかけて走る。それから急いで靴を穿き襦袢を着、麵麩を袋の中に入れ、牡牛を繋いでから、その日の仕事のために畑に行く。畑ではほんの一寸の間休息んだ後、葡萄の房を漉り取つたり籬を刈りだりして、その日を過す、そして日の暮にもなれば、よし疲れて居るとしても嬌々として、綱で牛を牽くか長い枝で追ひながら村に歸る。

日が暮れて、家畜が追ひ込まれると、彼女はその襦袢の廣い袖に種を一ぱいに詰め込んで、他の娘達と一緒に笑つたり喋つたりするために町角へ出かけて行く。けれど黄昏の光が空から全く消え失せると直ぐ彼女は必ず家に歸る。そして暗い酪乳場で父や母や弟と一緒に夕御飯を食べると直ぐ、物ごとに關はず、生々として、小舎に行つては竈の上に坐りながら、半ば夢見る心地で下宿人の物語をきく。

彼が歸つて行けば、彼女は寢床の上に身を投げ出すやうにして寝ころんで、ぐつぐつと穏かな、夢も見ない睡眠を朝まで食ふ。そしてまたその次の日も同じことで婚約の日からして此方、ルカアシユカには會はないが、さうやきもきするでもなく、結婚の日を待つて居た。彼女は今や、その下宿人とすつかり馴染んでしまつて、彼の眼が彼女の上にとまつて居ると感ずるのが嬉しい程になつた。

三〇

熱さから脱れることは出來ず、納は小馬車の影の氣持のいゝところに群がつて居る。そして又、小さな弟は轉びまはつて彼女を打ちつけて居たにも拘らず、マリアナは、尚ほ手巾で顔を覆うて深い眠りに落ちて居た。するとそこへ、突然隣のウステンカが驅け込んで来て、荷車の下に這り込み、マリアナの側に寝ころんだ。

「さあ、寝よう、寝よう。」と小馬車の下に落着いた時、ウステンカは云つた。「だけど、ちよつとお待ち。」もう一度立ち上りながら彼女は附け足した。「これちや氣持ちがよくない。」そこで、彼女は跳び上つて五六本の縁の枝を折つて来て、それを荷車の二つの轆に絡みつけ、ベシユメットをその上へばいにひろけた。

「あつちへ行きな。」もう一度小馬車の下に這ひ込んだ時、彼女は男の子に云つた。「カザックは娘兒と一緒に居ちやあいけないぢやないの。さあお行き。」

小馬車の下で、友達と二人きりになつた時、急に彼女は兩腕に友を抱えて、自分にしかと抱きしめた。そして頬や頸に接吻をし始めた。

「可愛い人！ 兄さん！」と彼女は叫んで、美しく漣の立つ様な笑ひ方をした。

「あらッ！ 小さな祖父さんに習つたんだね。」とマリアンカは身を運れようとしながら答へた。「いれッ！ およしよ。」

二人はキャッ／＼と笑ひ崩れた。そこでマリアンカの母がきつい聲で二人を叱りつけた。

「嫉けやしないかい。」とウステンカは囁いた。

「馬鹿らしい。まあ、ちよつと寝かしてお呉れよ。でも、何で来たの？」

けれどウステンカは、ひるまなかつた。「何を話しに来たと思ふの？」

マリアナは腕を衝いて起き上つて、皺くちやになつて居る手巾をのばした。「ぢや、一體何のことなの？」

「私やあんなのとこの下宿人のこと知つてるよ。」

「知るやうなこと、何にもないわ。」とマリアナは答へた。

「しらばつくれるもんぢやないのよ。」と、ウステンカは腕で彼女を小突いてクス／＼笑ひながら叫んだ。「あんたは何にも云ひ度くなくつても、あの人はあんたに會ひに来るだらうね？」

「それで？ それが何うだつていうの。」とマリアナは云つたが、顔がサッと赧くなつた。

「いゝよ、私やこの通りの馬鹿娘さ、だけど、私だつたら誰にでも喜んで話すよ、何うしてそれを秘さなきやならないの？」とウステンカは要求した。そして彼女の嬉しさうな蔷薇色の顔が考へ深い表情をとつた。「わたし誰かに害をしてるか。私が彼の人に惚れて居るからつて、たつたそれだけの話しぢやないの？」

「誰に？ 小つちやな祖父さまに？」

「あゝ、さうだよ。」

「だけど、そりやいけないよ。」

「あゝ、マアセンカ、人は娘の時に樂まないで何時樂しめるの？ お嫁入りをすりや、直き子供を

産んで、心配事の絶える時がないわ。ね、あんたは今、ルカアシュカに片づかうつてしてんだが、さうすりや楽しみに左様ならよ。楽しみやもう二度来ないよ、そしてその代りに子供と仕事とが来るのよ。」

「それが何うだていうの。結婚をしたつても、みんなは仕合せに暮してゐるぢやないの？ 同じことよ。」とマリアナは穏かに答へた。

「これさ、たつた一編お話しよ。あんたとルカアシュカとの間は何うなつてゐるんだえ？」

「何うつて、あれだけの事さ。あの人が私を望んで、お父さんが一年のぼしたんだけれど、此の秋結婚する様にきまつたのさ。」

「だけど、何てあの人はあんたに云つて？」

マリアナは笑つた。「何を云つたか、わかりきつてゐるぢやないの？、私に惚れるつて云つたわ。そして何かと云や、一緒に畑へ行かうつて云つたわ。」

「何てえ鷺鳥さんだらうねえ？ で、勿論あんたは行かなかつたらうねえ？ たけど、今は何てえ豪者になつたんだね。あの人は。村で第一番のジギツドさ、そして今は小邑で何うしてると思ふねーつひ此間もキルカアが歸つて来て、あの人が馬を手に入れたことを話して行つたッけ。でも、あんたはあの人の氣を悪くしたのねーで、その外にあの何人何て云つたの？」とウステンカはたゞみかけ

た。

「何でも彼でも知らうてえんだね、それぢや、あんたは。」とマリアナは笑ひながら訊いた。「何時かの晩、あの人は馬に乗つて窓のところまで遣つて来たんだよ。酔ッばらつてね。そして中に入れてと云ふのよ。」

「で、あんたは入れなかつたのかい？」

「入れるものかね。私や何時かそう云つといたんだから、その言葉を守つたのさ。あたしや岩のやうに固いんだから。」とマリアナは嚴肅に答へた。

「だつて彼の人にはあんな豪者だで、どんな女だつて、そんなには撥ねつけ得ないんだよ。」

「ちや、他の女のとこへ行ぐがいよ。」とマリアナは傲然として答へた。

「あんたはあの人の氣の毒ぢやない？」

「あゝ、だつて私や馬鹿なこと仕度あないよ。そりやいけない事だよ。」

ウステンカは急にその顔を友達の胸に埋めて腕に彼女を抱きながら、笑ひを抑へやうとして身體を揺すぶつた。

「あんたはのろまのお馬鹿さんねえ。」と彼女は噴き出しながら叫むだ。「あんたは幸福と云ふものを知らないんだよ。」で又彼女はマリアナを小突き初めた。

『あゝ、お止しつたら。』とマリアンカはキャ／＼と笑ひこけた。『あんたラズウトカを感しつぶすぢやあないか。』

『これさ、この悪魔奴等！ 馬鹿あ止さねえかよ、眠らりやしないよ。』と年とつた奥さんの眠さうな聲が又荷馬車の近くにきかれた。

『あんたは幸福と云ふもの知らないんだよ。』とウステンカは坐りかけ乍ら小聲で、繰返して云つた。『だけどあんたは仕合せだね、ほんとうに！ みんなに惚れられてさ！ 痘痕面してるのに、それなのにみんなに惚れられるんだよ。あゝ、私が若しあんたどつたら、あんたのあの下宿人に私の小さな指を捲きつけてやるんだのに！ あの人がわたしの家に来た時わたしやよく氣をつけて見たんだが、あの人はあんたを噛みつくやうにして見てたよ。あの小さな祖父さんは私の友達だが、何だつて私に呉れるよ！ だけどあんたのこのは、ロシア第一の金持ちだつてぢやないか、あの人の従卒の話ぢやい何でも自分の奴隷さへ持つてるさうだよ。』

マリアナは起き上つて、頭の中に浮んで来た考へに微笑んだ。

『うちの下宿人が何時か私に何て云つたと思ふね。』と彼女は草の葉を噛みながら續けた。『僕あかザックのルカアシユカか、お前の弟のラズウトカだつたらいゝがなあ。』つて云つたよ。『なぜそんな事云つたんだらうねえ？』

『なあに、あの連中は何時でも出解目云つてるんだからね。』とウステンカは答へた。『あたしんどのなどは何を云つてんだかね！ ほんとに可笑しな奴よ。』

マリアナはベシユメットを枕にして、腕をウステンカの肩に捲きつけた。そして眼を閉ぢた。

『今日あの人は畑に来て働きたがつてたよ。お父つあんが彼の人を招んだんだよ。』とちよつと間を置いてから云つたが、やがてすやく／＼と眠りに落ちて行つた。

三二

太陽は今や、小馬車を影に覆うて居た梨の木の後方から動いて行つた。そしてその斜光は、ウステンカの工夫した小枝の目隠しを射し透して、眠つて居る少女達の顔を焦がした。マリアナは目を醒まして頭巾を直し出した。あたりを見まはして居る間に、ふと彼女は梨の木の彼方に、下宿人が鐵砲を肩にして自分の父と談しながら立つて居るのを認めた。彼女はウステンカを肘で突つて、何も云はずに、たゞ微笑みながら彼女の注意を彼の方に向けさせた。

『僕は昨日行つて見たんですがね、全然駄目でしたよ。』と云ひながら、オリエーニンはキヨロ／＼とあたりを見まはしたが、枝の目隠しの下に居るマリアナには氣がつかかなかつた。

『しかし貴方は、磁石の指し示すところに従つて眞直ぐに河の眞つ縁まで行くべきだつたんです。』

するとそこに、私共が『荒地』と呼んで居る廢園があるんですが、そこにや野鬼が何時だつて目つきり
ますよ。』と、旗手は急にその話しつ振りを替へて云つた。

『仕事時に兎を追つかけて暮すなあへまな事ですよ。』と老奥さんは機嫌よく云つた。『それよか、俺
等のとこへ来て手傳つて呉れりよよかつたよに……娘等と一緒に面白く暮せますよ……これ、阿魔つ
ちよら、そこから出て来んかや。』と彼女は叫んだ。

マリアナとウステンカとは小馬車の下でひそく話をして居たが、何うも笑ひを抑へる事が出来
なかつた。

オリエーニンが五十モネタもする馬をルカアシユカに與へたのを知つてから此方、旗手とその妻は彼
に大變お世辭をつかふ様になつた。とりわけ旗手は、オリエーニンがマリアナとだんく近づきにな
るのを見て満足して居る様に見えた。

『しかし僕には働き具合が解らんのですね。』とオリエーニンは、枝の目隠しを通して、青い襦袢と赤
い頭巾がちらと目についた小馬車の方に目を遣るまいと骨を折りながら云つた。

『來さつしやい、桃をあけるべえ。』とウリトカ奥さんは云つた。

『これがカザックの舊い款待法でしてなあ——年とつた女の愚鈍の一片です。』と旗手は、説明する
やうに、そして、さながらウリトカ奥さんの言葉を訂正するやうな風に云つた。『ロシヤでは、パイナッ

ブルの砂糖漬けを食べる程には桃を食べない様でしたな。』

『ではその廢園には獵がありますね。』とオリエーニンは訊いて、『僕は行つて見やう。』と、小枝の衝
立の方にちらと一瞥を投げながら、カザック帽のババハを擧げ、葡萄島の眞直な緑の並木の間に姿を
消した。

オリエーニンが宿の島に歸つて來た時には、太陽はもう垣圍のうしろに沈んで居た。そしてその稀
薄になつた光が半透明な木の葉の隙間から輝いて居た。風は鎮まつてしまつて、氣持のいゝ涼しさが
葡萄島のうにひろがり初めて居た。オリエーニンは、一種の本能力によつて、ずつと遠いところか
らして既に、葡萄の幹の列の間にマリアナの青い襦袢を認めた。そして彼は、行く／＼葡萄を拾ひ上
げながら彼女の方へと進んで行つた。ハア／＼と喘いで居る彼の犬も亦、時々、よだれを垂らして居
る口で、低く垂れ下つた房を引つたくつた。暑さですつかり紅くなつたマリアナは、袖口をまくり上
げ、そして頭巾を顎の下まで垂らしながら、重い房を手ばやく刈りとつては籠の中に入れて居た。

彼女は、手にして居た葡萄の枝を放しもせず、しばしの間休んで、愛情深く微笑んだが、直きに又
仕事を初めた。オリエーニンはその側に寄つて行つて、自分の手が自由になるやうにするために鐵砲
を肩に懸けた。『やあ、みんなは何處に居るね？ 精が出るね、お前獨りかね。』と云ふ言葉が唇まで出
て來たけれど、彼は遂に何も云はなかつた。そしてたゞ帽子をあけた。マリアナと二人つきり居

ると云ふ事に気が咎めたけれど、さながら自分と自分を苦しめるかのやうにも、彼女の側に寄つて行つた。

『あなた、そんなにしては女を鐵砲で射つわ。』とマリアナは云つた。

『いや、大丈夫危かないよ。』

そこで二人とも黙つてしまった。

小さなナイフを取り出して、彼は黙つたまゝ房を切り初めた。そして、少くとも三磅の重さはある、ぎつしりと一ぱい生つて居て、平たくなる程押し合ひ、へしあひして居る重い房を葉の下から引きおろしてマリアナに見せた。

『みんな切つてしまふのかい、こいつはもう實つてるかい。』

『どうれ、見せて御覽よ。』

二人の手は觸れた。オリニーンは女の手を握つた。女は微笑みながら彼を眺めた。

『お前はもう直き結婚するんだらう。』と彼は訊いた。

彼女はその大きな黒い眼で彼を眺めた。そして返事をしないで傍を向いた。

『そしてお前はルカシユカに惚れてるの?』

『それが何うだて云ふの?』

『嫉けるんだよ。』

『あんなことを!』

『本當だよ、お前はそんなに美しいんだからな。』

すると急に彼は、自分の云つた事に非常な耻かしさを感じた。その言葉には實際そんな耻を感じる様な野卑な響きがあつたと彼は考へた。彼の血は沸き上つた。そして自分が何をしたかも知らないで彼女の両手を掴んだ。

『私は何んなだつて、私やあなたのもんでないわ。何であなたは冗談云ふの?』とマリアナは答へた。けれど彼女の眼は、彼が彼女に戯れて居るのでないと云ふことをしかと確めて居ることを示して居た。

『冗談だつて! 若しお前が知つて居て呉れたらなあ。さうしたら何處に僕が……』

彼の言葉は彼には尙更平凡に響き、實際に感じて居るのは尙更かけ離れて居る様に思はれた。しかし彼は尙つゞけた。

『口には云へないが僕は何時だつて……お前のためになら何だつてしないと云ふものはないよ……』

『聴き度くないよ、人いちめさん!』

けれど、彼女の顔も輝く眼も波立つ胸も格好のいい手足も、凡てはみな、彼にその正反對を告げて居た。彼が彼女に云つた事が凡てどんなに平凡であるかを了解はして居ても、彼女はそんな事を問題にする様な女でない様に彼には思はれた。また彼女は、彼が彼女に話したいとは思ひながらも、思ひきつて云ひ出すだけの勇氣をもつて居なかつたと云ふ事をすつと以前から知つては居たが、それでも彼がどんなに云ふか聞いて見たいものだと思つて居る様に彼には思はれた。そして、彼が彼女に告げたいと思つて居ることは凡て、彼女自身の欲して居た事だから、彼女がそれを知らないと思ふわけはない筈だと彼は考へた。『それなのに此の女は了解することを欲しないのだ。また答へる事も欲しないのだ。』と彼は自分に云つた。

『ホウ！』と云ふ聲がだしぬけに餘り遠くない葡萄の樹の間にきこえた。かと思ふと、ウステンカの細い聲とその愉快さうな笑ひが鳴り響いた。『いらつしやい、ドミトリー・アンドレ・井チ、来て手傳つてお呉れ、あたし一人なの。』圓い無邪氣な小さな顔を木の葉の間に現はしながら、ウステンカはオリニンに呼びかけた。

オリニンは答へなかつた。そしてその場所から動かなかつた。

マリアナは仕事をつとけた。けれど始終その下宿人に眼を呉れ勝ちであつた。彼は何か云ひかけやうとした。が止めた。そして肩をすくめ、鐵砲を直して、葡萄島を急いで出て行つた。

三三二

彼は一二度立ち停つて、マリアナとウステンカが一所に寄つてかなり大きな聲で話しながらカラ／＼と高笑ひをして居る聲に耳を傾けた。

オリニンには午後ぢゆうすと、獲物を求めて森を彷徨ひまはつたが、日の暮に歸つた時には全く何も捕つて居なかつた。庭に這入ると、酪乳場の戸が開いて居て、青い襦袢がその中で動きまはつて居た。彼は、此の家のものが彼の歸つた事に氣づく様に、わざと大きな聲でワアニニシヤを呼んだ。そしてそれから、玄關の常時の場所に腰を掛けた。家のものはもう島から歸つて居た、彼等は酪乳場から出て来て小舎の中に行つた。けれど彼にやつて来る様にと招待しなかつた。マリアナは二度門のところまで行つた。一度彼は、もう薄ほんやりとしては居たけれど、何だか彼女が彼を眺めて居るやうな氣がした。彼は熱心に彼女の一舉一動を見落すまいとした。けれど彼女のところへ行く決心をする事は出来なかつた。でも、彼女が家の中に這入ると、玄關から降りて、内庭を彼方此方と歩るきまはつた。けれどマリアナは出て来なかつた。オリニンはその晩夜一夜、旗手の小舎の凡ゆる音に耳を傾けながら、一睡もせず、内庭で過した。

宵のうちには、家族のものが話し合つたり、晚餐をたべたり、羽毛床を持つて来て、寝る用意をし

て居るのが聞えた、マリアンカが何かの事で笑つて居たが、聽てだん／＼と静まりかへつて行つた。旗手は小聲で妻と話して居た、そして誰かその側で溜息ついて居る様だつた。が、遂に彼は、家中に這入つて行つた。すると、ワアニュシヤは着物を被た儘眠つて居た。オリエーニンは彼を羨んだ。そしてまた、もう一度庭に出て行かすには居られなかつた。彼はそこで、今にも誰か出て来る様に思ひ／＼とした、けれど誰も現はれて来なければ、動きもしなかつた。きこえるものとはたゞ、三人の規則正しい呼吸づかひであつた。彼はマリアナの呼吸をきゝわける事が出来た。そして、たえずそれに耳を傾けながら、自分の胸の鼓動のきこゆるを覺えた。

村はすつかり静かであつた。選出の月が昇つて居た。内庭で寝ころんだり、ゆつたりと立ち上がりたりする、喘げる家畜が、だん／＼と見えて来た。

オリエーニンは腹立たしげに「何を俺は欲して居るのか。」と自分に訊いた。それだのになほ、この見張りを打ちきる事が出来なかつた。

と、急に彼は、旗手の小舎の板床の上を歩く足音と、その軋る音とを、はつきりときゝ分けた。彼は急いで戸の側に行つた、けれどまた、規則だつた呼吸の外何もきこえなかつた。すると、水牛の牝が重い溜息をついて膝で起き上り、それから四つ足で立つて尾を振つた。そしてそれに續いて、何か規則立つた音が庭の乾いた土の上に落ちたかと思ふと、やがてまたその動物は、溜息をついて霧深

い月光のうちに寝ころんでしまつた……。

「何を俺はしようとして居るんだ。」と彼は、断然寢床に就かうと決心しながら自分に訊いた。が、再びまた同じ音がきこえたかと思ふと、マリアンカの姿が半透明の月夜のうちに現はれた様に思つた。で、今一度彼は、戸の側まで行つた。するとまた足音がきこえた。今にも夜が明けるかも知れない位の時に、彼は窓のところに行つて硝子板を叩いた。それから彼は戸口に走り寄つたが、今度はマリアンカの足音の近寄つて来るのがきこえた。彼は、鑷を握んで、それを振つた。殆んど音もさせない蹠足が、そうつと戸口の方に近寄つて来た。鑷が上げられて戸が軋ると、マヨラナと甜瓜のいゝ香ひがして来て、マリアンカの全身が闕の上に現はれた。

彼女は戸をバタリと閉ぢた。そして何かブツ／＼と呟きながらサッサと走り歸つてしまつた。オリエーニンは軽やかに叩き初めた。けれど何の應へもなかつた。彼は復窓のところに戻けよつて耳をそば立てた。

すると、不意に男の鋭い甲走つた聲がして、彼を正氣に引き戻らせた。

「天晴々々！」と白い小羊皮の帽子を冠つた長身の低い小さなカザックが内庭を横きつてオリエーニンに近づきながら叫んだ。「そこ見とゞけた。天晴々々！」

オリエーニンはナザアルカだとわかつたが、何うしたらいいのかわからぬ、又何と云つたらいいのかわから

ないので、返事をしなかつた。

「天晴々々！ さあ、俺あ村長のところへ行くだ。行つて何もかも洗ひざらひ云つてやるだ。それからあの女の親爺にも、見上げた娘だよ、旗手の娘は！ 一人の男ぢや足んねえと見える。」

「僕に何うしてもらはふと云ふんだ。何を欲しいと云ふんだ。」とオリエーニンは訊いた。

「何にも要らねえや、俺あた村長のところへ行くだけのことだ。」

ツアザルカは馬鹿氣た大きな聲で語つた。明かに故意に。

「お、何てえ猾るい見習士官だらう、此奴は！」

オリエーニンは震へて蒼くなつた。

「こつちへ來給へ、此方へ來給へ。」

と力まかせに腕を捕へて彼を自分の小舎に引き入れた。

「何事もなかつたんだよ。あの娘は僕を入れたがらなかつたんだよ、そして僕も這入らなかつたんだよ……彼の女は潔白だよ……。」

「何うだか知れたものかい。」とナザアルカは云つた。

「兎に角何かやらうよ、何れにしても……まあ、ちよつと待ち給へ……。」

ナザアルカは答へなかつた。オリエーニンは中に這入つてカザックに十留持つて來てやつた。

「全く何も起りやしなかつたんだ。しかしそれが何うあらうと僕の悪るかつたのは同じだ。さあ、これを取つといて呉れ。たゞ何うか誰にも云はないでお呉れ。全く何事も起りやしなかつたんだからね……。」

「左様なら。」とナザアルカは笑ひながら云つて出て行つた。

ナザアルカはその晩ルカアシカの依頼で、盗んだ馬を預けるところを求めに來て居たのであつた。

彼は丁度此の通りを通り抜けようとして居る。足音をきいたのであつた。次の朝小邑に歸つてから、

彼は、どんなに巧みに十モネタ儲けたかと云ふ事をいゝ笑ひ草にして話してきかせた。

オリエーニンはその朝、家のものに會つたが、誰も何事が起つたかを知るものがなかつた。彼は一言もマリアナと言葉を交はさなかつた。マリアナは彼を見てたゞ微笑んだばかりであつた。彼はまた

空しく内庭をぶらつき廻りながら今一晚眠らずに過した。そしてその翌日は獵に行つた。夕方に歸つ

て來てからは、慾望の淵から脱れるためにビレツキイを訪ねた。彼は自分が恐くなつて居た。で、も

う決して旗手の家へは訪ねて行くまいと誓つた。

その次の晩、オリエーニンは傳令に起された。彼の中隊が即刻遠征に出かけねばならぬと云ふ命令

を傳へて來たのである。彼はこの救ひに小躍りして喜んだ。そして決してもう二度と此の村には歸ら

ないだらうと云ふ豫感を感じた。

山地の侵掠は三日間つゞいた。司令官はその親戚に當るオリエーニンに會ひ度がつた。そしてその幕僚にならないかと申出たが、オリエーニンはそれを斷つた。彼は村を離れては住むことが出来なかつた。彼は歸れるやうにと願つた。

侵掠に於いて彼の爲した功績に對して、彼は十字章を贈られた。しかし、以前はあれ程それを欲しがつて居たのに、今はもう全くそれには無關心であつた。まだ辭令の下つて居らない昇進のことなど來ては尙更さうであつた。歸りには、まだその場合でないのに、彼はワアニュシヤをつれて戦線に馬を驅り、中隊よりは數時間も前に村に着いた。夕方には長いこと彼は立關に坐つてマリアナを睨めて居たが、夜になると、また何等の當てもなく、また考へもなく、内庭をあちこちとぶらつき廻つて過した。

三三三

翌朝オリエーニンは遅く目醒めた。家の者は仕事に出かけて居た。彼は獵に行かなかつた。そして或時には本の間に埋れたり、或時には立關に出て行つたり、さうかと思ふとまた、家の中に這入つて、寢床の上に身體を投げつけたりして居た。ワアニュシヤは彼が病氣をして居るのだらうと考へた。夕方前に、彼は急に決心して跳び起きたが、坐つて書き初めた。そして夜おそくまで書きつゞけた。彼

は手紙を書いた。けれどそれを出さなかつた。それは誰も彼の云ふ事をわかつてくれるものがなく、また、彼以外の誰も、それを了解する理由がないと思つたからであつた。

次が彼の書いたものだつた。

『自分は露西亞から幾つかの哀悼の手受取つた。彼等は自分がこの曠野に埋もれて自らを破滅ささうとして居るのでないかと恐れて居る。彼等は自分のことを斯う云つて居る『彼は粗野になるだらう、凡ての趣味を捨て、酒を呑み初めるだらう、そして何よりも惡い事はカザック娘と結婚するだらう。』と。彼等はイェルモロフが『誰でもカウカサスに十年住んだものは自分を死に導くまで飲み乾すか、淫賣婦と結婚してしまふ。』と云つた事を、全くその通りだと云ふ。

『如何に恐ろしい事であらう！ 自分が若し、貴族の侍従、若しくは式部官なるB伯爵夫人の夫となつたならば、自分は實際に自らを破滅に導くやうな事がなく、非常に幸福であらうか。自分の眼には如何に卑しく且つ賤しむべく君等は見える事か、君等は、幸福が何であるか、又、人生とは何であるかを知らない。君等は、一度全くその無技巧の美に於ける生活を経験しなければならぬ。君等は、自分が毎日眼の前に見て居る事を見且つ了解しなければならぬ。——即ち、山々の永遠にして近づき難い雪、創造者の手から造られた最初の女が持つて居たに相違ない原始的な美を賦與されて居る氣高い女を、そして然る時、君等は始めて、『誰が破滅の底に沈み行きつゝあるか、誰が眞を生き、誰が偽

を生きて居るか、——それは君等であるか、僕等であるか。」と云ふ問題に答へる事が出来るであらう。

『若し君等にして、自己欺瞞の如何に卑しむべく憎むべきかを知つて居て呉れさへするなら……自分の小舎や森や戀人の代りに、君等の客間や假毛を混へ香油をふりかけた捲毛をもつて居る貴人達や、その不自然に動いて居る唇や、隠されそして不自由な弱い手足や、談話のやうに見せかけては居るが、その實その名に慣ひしない流行の無意義な言葉などを思ひ出す時、——あゝその時こそ自分はもう遣りきれない。自分はあの空洞な顔や、『かまはない事よ、お望みならいらしていゝわ、私は金持の娘だけだ。』と云つた様な顔をして居るあの富豪の娘や、社交界の夫婦者がお互に悪る巧みをしたり戀愛をしたりする圖々しい顔、果てしのないお喋りや偽善、誰と握手して、誰に頭を下けて、誰とお喋りをする云ふ彼の規則や規律、そして最後には、人々がそれは遂に避くべからざるもの、また實際なくてはならぬものと信じて居る彼の幾代も幾代も傳はつて來た、骨髓にまで徹して居る果てしない倦怠、などを思ひ出しては苦しくてたまらない。

『一つの事を受けよ、若しくは一つのことを信ぜよ。君等は眞理とは何であるか、美とは何であるかと云ふ事を見且つ了解せねばならぬ。さうすると始めて君等の云ふ事や考へる事が塵の中に没し去り、それと共に僕及び君等自身に對する幸福の願望も消え去るであらう。幸福とは自然と共に在る事だ。自然を見、自然と語る事だ。』

『何うした事だ！ 彼は單なるカザック娘と結婚して、人生に於ける彼の凡ゆる光榮を損傷しようとして居る』こんな凡に、而も純眞なる憐みをもつて、人々が自分の事を云つて居るだらうと自分は想像する。しかし自分はたゞ一つの事を欲望する、即ち君達の意味するところから云ふと絶對の破滅だ。自分はこの單なるカザック女と結婚したいのだ。而も自分はこれをなす事を躊躇するのだ。何となればそれは自分の受けていゝものより高い幸福だからだ。

『自分が初めてカザック女のマリアナを見たのは三ヶ月前であつた。その時にはまだ、自分のやつて來た社會の思想や偏見が、自分のうちに生々しく生きて居た。そして自分も、その女と戀に陥るなんて云ふ事は自分には不可能な事だらうと感じて居た。自分の彼女を戀ふのは丁度山や空の美を愛するのと同じだ。そして自分の彼女を愛せずには居られぬのは、彼女が丁度山や空の美しきが如く美しいからだ。その後自分は、かうした美を冥想する事は自分の存在にとつて無くてならぬものとなりつゝある事を意識する様になつた。そして自分は自分に訊ねた。『俺は彼女に惚れては居ないのか。』と。しかし自分は、自分が、戀をこんなものでなければならぬと想像して居たのと同じ様な感じの何者も自分のうちに存しないのを見出した。それは寂寥の喘ぎや婚姻の欲求や或はブラトニックな愛情や、尙更また自分の嘗つて経験した事のある肉欲の欲望などは全然別物の感情であつたのだ。』

『自分は、彼女を見、彼女の聲をき、彼女が自分の側に居る事を感じる事が自分にとつて必要缺

くべからざるものであるのを感じた。そして自分は幸福ではなかつたが、しかし満足した。

『自分が彼女と一夜を過し、彼女に觸れたあの誕生日の宴會の後、自分は、自分と彼女との間には、目には見えないが跳いても斷つ事の出来ない細の存して居るのを意識して居ると感じた。

『而も自分は尙も闘争した。自分は自分に云つた。『自分の生活の智的興味を鑑賞することの出来ないこの女と戀をするなど云ふ事は、自分には一體出来る事か何うか。たゞ美だけで女を愛すると云ふ事は、即ち彫像を愛すると云ふ事は、果して可能な事であるか何うか。』これが自分の自分に訊いた事であつた。而も自分は既に彼女を愛しつゝあつた。たとひ自分自身の感情に於てそれを信じなかつたとは云へ。

『あの宴會の晩、自分は初めて彼女と話したのだ。が、それから此方、吾々の關係が變化したのだ。それまでと云ふものは、自分にとつては、彼女は外的自然の、不思議な、しかし莊嚴な物體であつた。ところが、宴會の後には、彼女は人間となつて表はれた。自分は彼女と會ひ初めた、彼女と話し初めた。彼女が葡萄酒で働いて居るのを見に行つたり、彼等の家で一晩ちゆう過したりする様になつた。そして此處に密接な關係を彼女と保つ様になつて、自分の眼には彼女はなほ、依然として純潔にして近づく事の出来ぬ崇高な存在として残されて居た。彼女は常に、又、何處でも、單純に、平靜に、倨傲に、そして晴々とした無關心をもつて答へた。時としては彼女は愛情深い、慨して云へば、ど

の一瞥も、どの言葉も、どの動作も、輕蔑的ではないが、人の心を壓倒するやうな魅惑する様な無關心の表白である。

『どの日もく、心にもない微笑を唇に浮べて、自分は自分の眞の感情を惹さうと努めた。そして自分の胸に燃ゆる熱情や欲求に苦しみながら何でもない言葉を彼女と取りかはすのであつた。彼女は自分が感情を伴つて居る事を知つて居るけれど、その眼はたゞ單純に率直にそして喜ばし氣に自分の眼に見入るのであつた。かうした状態はもう堪へ得るものでなくなり初めた。自分は彼女の前に誠實であらうと願つた。自分の考へや感じの凡てを彼女に告げん事を願つた。自分は常にもなく攪き亂されて居た——それは葡萄酒に於てである。自分は自分の戀を、言葉で彼女に告げ初めた。それを思ひ出すと自分は耻かしくなる——耻かしい、何故なれば自分はこれを彼女に云ふべきではなかつたからだ。自分は言葉や感情でもつて表白しようと思つたが、彼女はこれ等の言葉や感情よりもずっと高いところに立つて居たからだ。自分は黙つてしまつた。そしてその日から自分の地位は耐へられぬものとなつた。自分は以前の單なるくだらない關係をなほも續ける事によつて、自分自身を低下する事を欲しなかつた。而も自分は、單純にして率直なる關係に入る資格をもつて居なかつた。

『自分は絶望の極自分に訊いた。『一體俺は何うしなけりやならぬのか。』と、愚かなる夢のうちで、自分は屢々彼女を自分の情婦だと想像したり、妻だと想像したりした。そして自分はその何れの思想

にも嫌悪の感を深くした。彼女を自分の情婦にすると云ふ事は恐ろしい事だつたらう。それは殺人と同じであらう。彼女を自分のパールイニヤ、即ち、こゝで吾々武官の一人がやつた様に、ドミトリイ・アンドレエ・井チ・オリエーニンの妻、夫人、とする事は、もつと／＼悪い事だらう。

『さて、若し自分がルカフシユカの様に、馬を盗み、赤葡萄酒に酔ひ、姪娘な歌をうたひ、人を撃ち殺し、或は又、酔つて来ると、何を自分が爲して居るか、何のためにそれを爲したかと云ふ考へもなしに、彼女の居る窓から這ひ込んで行く一個のカザックとなりさへすれば、それは又別の事だらう。さうしさをすれば、吾々はお互に了解し合ふ事が出来るだらうし、自分も幸福であるかも知れない。自分は自己を捨て、此の種の生活に没入しようとする努力を見た。が、さうするとまた、自分の弱さと無能力さをもつと／＼強く意識し出した。自分は自分自身をも、自分の複雑なる變則な過去をも忘れる事が出来なかつた。そして自分の未来は更に／＼絶望的なものに見えて来た。毎日々々自分の前には遠い／＼雪の峰とこの崇巖にして快活なる女とがある。そしてこの世に於ける唯一の幸福は自分の達し得ないところのものである。即ち、彼女は自分にとつて近づき難いものである。自分にとつて最も恐ろしく最も心持のいゝ事は、自分が彼女を了解し得ない。また彼女が自分を決して了解し得ないと云ふ考へであつた。彼女が自分を了解しないのは彼女が自分よりも下であるからでは決してない、自分を了解することは彼女にとつては物の自然でないからだ。彼女は快活だ。彼女は自然の様にも

のだ。穩かで靜かで、そして圓滿自足して居る。それなのに自分は、不完全で、繊弱な人間でありながら、彼女が自分の醜さと苦しみとを了解せん事を願ふのだ。

『自分は幾晩も眠られぬ夜を明して、彼女の窓の下をあてもなく彷徨つきまはつたが、而も尙自分は、自分が一體何を求めて居るのかを自らに説明する事が出来なかつた。

『十八日に吾々の中隊は山地の侵掠に出かけた。三日間自分は村から離れて居た。自分の胸は曇つて居た。そして自分の周囲に行はれる凡ゆる事に無關心であつた。國境に居る人々の胸を占領して居た歌や、骨牌や酒宴や昇進についてのお喋りやは、平常よりはもつと厭はしいものであつた。今日自分は歸つて来た。自分は彼女を見た、自分の小舎を見た、又イエローシユカ小父をも、又玄關からは雪の山々をも見た。そして自分がそれ等の凡てを知り盡したので、實に強い新しい喜悅の情が湧いて来た。自分は此の女を純粹な愛をもつて愛する。自分の生涯のうちで最初で、そして唯だ一度の愛として。自分は自分の胸のうちに何があるかを知つて居る。自分は此の感情によつて自分自身を墮落させるのではないかと心配はしない。自分は自分の戀を耻とししない。寧ろそれを誇りとする。

『自分は自分の戀をして居ると云ふことを非難されるべきでない。それは自分の意志に反してなされたのである。自分は自己抛擲によつてそれが脱れようと試みた。自分がカザックのルカフシユカとマリアンカとの戀を喜んで居ると想つて居た。だが、それはたゞ、自分の戀と嫉妬とを強めたに過ぎな

い。これは一つの理想でない、自分が會つて経験したやうな、謂ゆる崇高な戀でない。又、戀人の方に惹きつけられたり、自分自身の胸のうちに愛情の泉を見出したり、凡ゆるものを自分自身の支配の下に置くと言つた様な、あの牽引の情でない。自分はまたこれをも経験した。それはまた性的満足の願望では尙更でない。全く異つた何かである。

『恐らく自分は彼女のうちに、自然を、即ち、自然に於て美である凡てのものゝ化身を愛するのであらう。しかし自分は自分の自由な意志の力で彼女を愛するのではない。自分をして彼女を愛せねばならぬ様にするのは本源的な力である様に見える。神の宇宙そのものゝ力である様に見える。全自然は此の愛を自分の心臓のうちに刻みつけて、そして『愛せよ!』と云ふ。自分が彼女を愛するのは自分の知識によつてでない。又想像によつてでもない。自分の全存在によつてである。彼女を愛する事に於て、自分は神の幸福なる全世界から分つべからざる一部分である事を感じる。

『自分は前に、自分の寂しい生活の産んだ自分の新しい確信の事を書き送つた。しかし誰も、どんなに骨折つて彼等が自分に働きかけたか、どんな喜びをもつて自分が彼等の支配の下に走つたか、而して自分の前に展らけた新しい道を認めたと云ふ事を知り得ない。此等の確信よりもつと高價なものは自分には有り得なかつた……さて……戀は來た、しかしてその確信は今何處に在るか。そしてそれに對する悔悛でさへ今は残つて居ない。自分がかゝる一面的な冷かな智的心狀を賞讃し得たと云ふ事

を了解する事すら自分には六ヶ敷い。美はその盛衰をこらしてあらはれた。そして自分の頭の凡ての勞作を粉碎してしまつた。そして自分にはそのなくなつたものを惜しむ心はない。自己否定とは無意味なくだらない觀念に過ぎない。それは凡て傲慢である。當然受くべき不幸からの避難所である。他人の幸福に對する羨望からの救済である。他人のために生きる、善をなす! 何故だ? 自分の靈が自分自身を愛する愛、及び一つの欲望——即ち、彼女を愛し、彼女と共に住み、彼女の生活を送らうとする欲望に充ちて居るではないか。他人の爲でない。ルカシユカのためでもない。自分は今や幸福を欲する。自分は今や、此等の他人を愛しない。今迄ならばこれはいけない事だと自分は云ふべきところだつた。彼女は何うなるのだらう、自分は何うなるのだらう、ルカシユカは何うなるのだらう、かう云つた問ひで自分を苦しめるところだつたらう。しかし今はもう自分にとつては何でもない。自分自身自身の自我で生きて居ない。自分よりもつと大きな力が自分を指導して居る。自分は苦しんで居る。しかしそれにも拘らず、以前は死んで居たのだ、そして今は生きて居る。今日自分は彼女のところに往かうとして居る。そして彼女に見てを告げるだらう。』

三四

此の手紙を書き終つた時はもう遅かつたけれど、オリニーニンは旗手の小舎へ行つた。老夫人は燦

爐の後で繭を紡ぎながら寝棚に腰を掛けて居た。マリアナは頭に何も被らずに蠟燭の光で縫物をして居た。オリエーニンに目がつくと、彼女は跳び上つて頭巾を取り煖爐の側へ行つた。

『これ、もつと居なよ、マリヤヌウシカ。』と老夫人は云つた。

『だつて私、頭が、すつほんほだもの。』

そして彼女は煖爐の上に攀ぢ登つた。

オリエーニンは彼女の膝や、垂下つてゐる、その美しくふくらんだ脚やから眼を放すことが出来なかつた。彼はウリトカ奥さんにお茶を御馳走した。奥さんはその返しに、クリーム・チーズを取りにマリアナをやつて、客にすゝめた。けれど、マリアナは血を卓子の上に置いて、また煖爐の上に攀ぢ登つた。そしてオリエーニンはたゞ彼女の眼を感じた。ウリトカ奥さんは家政問題に話しをすゝめて、それに熱中してしまつた。そしてオリエーニンに葡萄のジュリイや葡萄菓子や最上の葡萄酒を持つて来て、自分の額に汗して食を稼ぎ出す平民に特有な、あの無作法な、面も自慢たらくな款待で彼をもてなし通した。最初その餘りの無作法でオリエーニンを驚かした老奥さんも、今は却つて、單純な愛情をもつてその娘を取扱ふ事によつて彼を感動させるのだつた。

『神様にさからつて飛んでえゝものかね、お父つあん！ 妾等あ何でもあらあねえ、有り難えことにや！ もう葡萄も搾つてしまつて貯といてあらあねえ。三樽賣るつもりだが、それでもまだ飲料が十

分に残らあな。まあ、行きなさんなよ。結婚の前祝ひにもつと飲まうぢやないの？』

『だが、結婚は何時だね。』とオリエーニンは訊いた。顔に血がさつと上るのを覚え、心臓が不規則に且つ苦しく打つのを覚えながら。

煖爐の後ろでバサ／＼と、種の碎ける音がきこえた。

『ですが、もうこれ以上延ばされたもんぢやねえんで、ちやんともう用意は出来てますよ。』と老奥さんは單純に、さながらオリエーニンと云ふやうな人間が世界に存在して居ないかの様に冷靜に答へた。『妾あもうマリヤヌウシカに何から何迄整へてやりましたよ——一切合切をさ。立派なお嫁入させますだよ。たゞ一つ困つたことあ、ルカアシカの奴、此頃馬鹿にやくざになりましたな、始終酔つぱらつてばかり居ますだよ。悪る戯ばかりしあがつて仕様がな。此間もカザック兵が小邑から来て、彼奴がノガイへ行つたつてましたつけが。』

『もつと氣をつけるといふんだがなあ。』とオリエーニンは云つた。

『ほんとにさ、妾あ彼にさう云ふんですよ。』ルカアシカ、そんな危い事あ止めるがえゝよ、お前は若えだから見えを張りたがるなあ無理はねえ、お前は戦もしたし馬も盗んだしアプレクを殺しもした、お前は豪者だ！ だけどな、もうこれからあお前も穩かに暮したがえゝよ。』つてな。けども彼奴いま善くねえことばかりしてやがるんですよ。』

『さうだ、僕も國境で彼の男に二度逢つたが、何時も酔つぱらつて居たよ。丁度、馬をまた取つ替へたところでね。』とオリエーニンは煖爐の方を眺めながら云つた。

二つの大きな黒い眼がピカッと光つて、嚴めしく無愛想に彼を眺めた。彼は自分の云つた事を耻かしく感じ出した。

『御氣の毒様、彼の人は誰にだつて迷惑をかけてやしませんよ。』とマリアナは突然云ひ出した。『自分の金で自分の好きな事をしただけよ。』かう云つて彼女は、煖爐から跳び下りて、ピッシヤリと戸を閉めながら外へ出て行つた。

オリエーニンは彼女の舉動を見まもつた。そして彼女の出て行つた後も、ウリトカ奥さんの云ふこととに耳もかさずに、戸口を覗めながら待つた。やがて間もなく五六人の客が這入つて来た。ウリトカ奥さんの兄である一人の老人とイエローシユカ小父と、そしてその後ろにはマリアナとウステンカと。

『御機嫌よう。』とウステンカは小聲で云つた。『何時も御樂しみね。』

『さうだよ、愉快にして居るよ。』と彼は答へた。そして何とも名状し難い理由の下に、何となく撥がわるく耻かしがつた。外に出て行きたかつたが、何うもさうは行かなかつた。だと云つて、そこに坐つて黙つて居る事も出来ない様にも思はれた。老人は氣をきかして彼と一緒に飲まうと云つて来た。そして彼等は飲んだ。オリエーニンはそれからイエローシユカ小父と一緒にのみ、それからまた他のカ

ザックと一緒に飲んで、またイエローシユカと飲んだ。だが、飲めば飲む程彼の胸は重くなつて来るばかりだつた。然るに年寄りたちは益々元氣になつて来た。二人の娘は煖爐の上に攀ぢ登つて、みんなの飲んで居るのを眺めながら小聲で話し合つた。

オリエーニンは何にも云ふ事はなかつたが、他の者よりも餘計に飲んだ。二人の老カザックはお互にわめき合ひ初めた。ウリトカ奥さんは二人を追ひ出し、それ以上の赤葡萄酒を飲ます事を拒んだ。娘たちはイエローシユカ小父を笑つた。みんなが立關へ出て行つたのはもう十時であつた。老カザック達は自分の方から押しかけてオリエーニンのところに行つて飲み明さうと云ひ合つた。ウステンカは歸つて行つた。イエローシユカとウリトカ奥さんとはワアニュシャを探しに行つた。そして老奥さんそれ自身が、夜の整理をつけるために酪乳場に消えて行つてしまつた。

マリアナだけが小舎の中に残つた。オリエーニンはそれを見知つた。丁度今目ざめた時のやうな生みさと健さを彼は感じた。老人たちから脱れて、彼は小舎に戻つて行つた。マリアナはもう床に就いて居た。彼はその側に行つた。そして何か云はうとしたけれど聲が出なかつた。彼女は出来るだけ彼から遠退いて、驚いた様に黙つてジロ／＼と彼を眺めながら、寢床の上に蹲んで足を身體の下に引きよせた。彼女は彼を恐れて居るらしかつた。オリエーニンはそれを感じて居た。彼は自分が厭はしく耻しくてたまらなかつた。が又それと同時に、こんな感情をでも彼女に吹き込んだかと思ふと或る

誇らしい満足を感じた。

『マリアナ』と彼は云つた。『お前はちつとも僕を哀れだと思はないんだね。どんなに僕はお前を愛して居るかお前は知らないんだ。』

彼女はもう少し遠くへ動いて行つた。

『さう云つてるのは酒よ、あなたぢやないわ。何を云つてんのかわかりやせんわ。』

『酒ぢやないよ。ルカフシカをお捨て、僕はお前と結婚する。』『俺は何を云つてるんだ！』と彼はしかし、かう云ひながらも自分に訊いた。『俺は明日も同じことを云へるだらうか。』——『云へる、今もそして永遠に！』ある内なる聲がそれに答へる様に見えた。

『私と結婚して呉れるの？』

彼女は熱心に彼を眺めた。恐れがだん／＼となくなつて行く様に見えた。

『マリアナ、僕は氣が狂ひさうだ！自分で自分を何うする事も出来ないんだ。お前が爲ろつて云ふ事なら何でもする。』とりとめのない柔さしい愛の言葉が自づと流れて來た。

『まあ、そんな出鱈目を！』とマリアナは彼を遮つて、自分の方に展けられた彼の手を急に掴んで叫んだ。けれど彼の手を押しつけようとはせず、反つてその強い固い指の間にしかと握りしめた。

『紳士がカザックの娘と結婚するの？ あつちへいらつしやい！』

『でも、お前は僕のものになつて呉れるかい、僕は何時でも……』

『だつて、ルカフシカを何うするの？』と彼女は微笑みながら云つた。

彼は彼女がまだ擱んで居た手を振り放つて、彼女の若い身體をしかと抱いた。けれど、彼女は鹿の様に彼の腕から撥ね退いて跳び下り、跣足のまゝ玄關の外まで走り出た。そこでオリニンは正氣に歸つて、自分に身震ひした。再びまた彼は、彼女と比べて自分がどんなに卑しいかわからない様に思はれた。しかし一瞬の間も自分の云つた事に後悔する事がなかつた。彼は彼の酒をあほつて居る老カザックたちには眼もくれずに、其まゝ寢床の上に身を投げて、幾晩も／＼の眠りより、もつと深い眠りに落ちた。

三五

その翌日は或る祭日であつた。午後には住民は集つて住來に出て居た。その晴着は落日のかがやかしい光に照らされて美しく輝いて見えた。

葡萄の收穫は例年よりは豊かであつた。そして人々はもう労働を終へて居た。一月すればカザックが進軍するだらうと云ふので、そここゝの家では結婚の準備に忙しかつた。役場の前の村の四辻のところには、一つには糖菓や西瓜の種を賣つて居り、今一つにはキャラコや衣裳類を賣つて居る二軒の

店があつた。そのあたりには、もつと澤山の人間が集つて居た。役場をめぐつて居る露臺には、打紐も裝飾もない、地味な灰色や、黒のジイブンを着た老人達が交つたり坐つたりして居た。彼等はのり／＼と調子のいい聲で、收穫のことや子供等のことや世間のことや、善かつた昔のことなどを話しながら、若い者どもを倨傲に白眼視んで居た。

女たちや娘たちは、その前を通りかゝつては立ち止つて頭を下けた。若いカザックたちは恭々しく歩みを弛め、ババハ、即ち羊皮帽をとつて頭の上高くあげた。老人たちは話をやめて、或者は嚴格に、或者は愛情深く、その高い帽子を上げては復た頭に冠りながら、通つて行く若者たちを眺めた。

カザックの娘たちはまだホロヴード踊、即ち、通俗な合唱踊を初めては居なかつた。けれど、色々染め分けたベシメットを着、白い頭巾を眼の上あたりまでも顔に被つたのが群をなして、夕日の斜光を避けて、草の上や小舎の露臺に坐りながら、楽しさうな聲で笑つたりお喋りをしたりして居た。小さな男の子や女の子たちはラプタと云ふテニスはやうな遊びをして、球を高く、雲のない空に投げては、喚めいたり叫んだりしながら廣辻場のあたりを駆けまはつて居た。年頃の娘達は廣辻場の一端でホロヴード踊のおさらへしたり、おづ／＼した黄ろい聲で歌をうたつたりして居た。官立學校から、祭日で休暇をもらつて来たカザックの教師や生徒たちは、さつぱりとしたリンネルや打紐で縁どりした新調の赤チエルケスカと云つた服装で、お祭顔をしながら、手に手をとつて二人もしくは三

人位の組をなして、女や娘の群から群へと彷徨き歩るいては、立ち停つて女たちと言葉を取りかはしたり冗談口をきいたりなどした。

打紐で縁どつた立派な布の青チエルケスカを着たアルメニア人の店主が店の戸口に、東洋の商人らしい高慢な風つきをし、自分の大切な人物である事を意識して居るらしい風つきで立つて居た。その戸口のところには、きらびやかな色の頭巾が買氣をそゝる様に並べられて買手を待つて居た。

テレクの向ふ岸から祭を見に遣つて来た赤鬚の跣足のチエメン人が二人、知人の家の戸口に蹲つて、短いパイプで無遠慮に煙草を喫つては唾を吐きながら、喉ごゑで自分達の觀察したことを話し合つて居た。

其處此處には兵卒たちが平常服の舊い上衣を着て、華やかな色をした群の中を、廣辻場を横ぎつてさまよつて行くのであつた。もうちよい／＼と、宴會をして居るカザックの酔つぱらひ歌がきこえ初めた。どの小舎も／＼閉められて居た。玄關はもう前の晩に、さつぱりと洗ひ清められて居た。年寄女ですら戸外に出て居た。乾いた埃っぽい往來の、何處にも此處にも甜瓜の殻や南瓜の種が散らばつて居た。空気が穢かで静かであつた。雲のない空は蒼くて透徹つて居た。屋根から上に衝つ立つて居る山々の純白色の峰は、非常に近くに見え、夕日の光に照らされては蔷薇色に變りかけて居た。時々、河の方面に當つて、微かな砲聲が響いた。しかし村ではただ喜ばしい祭日の、雑多な響きがこつ

ちやになつてきこえるばかりだつた。

オリエーニンはマリアナに會ひ度いと思つて、朝のうちは庭にばかり出て居た。しかし彼女は晴着を着て會堂へ彌撒に行つた。それから、種を噛みながら他の娘たちと一緒に、露臺の上で幾時かを費した後、五六人の友達をつれて歸つて来て、快活な柔さしい視線を下宿人に與へた。オリエーニンは彼女に冗談を云ひかける事を恐れた。ことに他の娘の前では。彼は前の晩行はれた事に就いて彼女に話し、そして彼女から最後の決答を得たいと思つて居た。前の晩経験した様な瞬間を、彼はもう一度待ち望んで居た。けれどその時は來なかつた。そして彼は、此處不確な状態をつゞけて行く事は到底堪へきれぬものではないと感じた。マリアナはまた往來に出て行つた。それから少しばかりしてから、彼も亦、何處に行かうとして居るのかも知らずに、ただ彼女の後を追うて出て行つた。青い縞子のベシユメットを着て、輝くばかり立派になつて居るマリアナの立つて居る街角を通つたが、彼女の娘らしい笑ひ聲をきくと、彼の心は或る甘い苦しみでもつて一ぱいになつた。

ビエレッキイの小舎がその四辻のところにあつた。オリエーニンがそこを通りすぎると、若い公爵が彼に這入れと呼ぶのがきこえた、そして彼は這入つた。話しながら二人は窓の中に坐つて居た。やがてイエローシユカ小父も、新調のベシユメットを着てやつて來た。そして彼は、彼等に近く床の上に席を占めた。

「あそこに貴族の群が居るよ。」とビエレッキイは微笑を洩らしながら巻煙草で街角に居るケバ／＼しい色の群を指して叫んだ。「そして彼處に僕のが居る、見えるかね、あの赤いのだ。新調の着物だよ——おゝい、踊りをもう始めるの？」と青年は窓のところから叫んだ。「暗くなるまで待ちな、僕等もまざるから。それからみんなをウステンカの家へ連れて行くんだな、そして舞踏會でもやつてやらなきや……」

「僕もウステンカのところへ行くよ。」とオリエーニンはきつぱりと云つた。「マリアナも行くだらうか。」

「行くともさ、來給へ、是非に。」とビエレッキイは少しも驚いた様子もなく云つた。「繪の様ちやないかねえ。」と彼は美しく着飾つた娘たちを指示ながら附け足した。

「ほんとにねえ。」とオリエーニンは平靜に見せかけようと努めながら同意した。そして附け加へた。「こんな祭りの日になると、(僕は不思議に思ふんだが)たとへば今日の様に十五日なら十五日だと云ふので、何故人間がみんな、急にあの様に快活になり満足する様になるんだらうねえ。凡ゆるものみなお祭りだと云ふ風をして居る。眼でも顔でも聲でも動作でも着物でも、それから空氣や太陽までも。」

「全くだ!」こんな理窟つほい問題を好まないビエレッキイは云つた。そして「だが、何故飲まない

んだね、老人。』とイエローシユカ小父の方に向きながら云つた。

イエローシユカはオリエーニンに目くばせした。そしてビレットキイのことを云つた。

『本當に、お前様の此の客友は立派な人だよ。』

ビレットキイは盃を舉げた。そしてそれを飲み乾した時 Allah birdui (Allah birdui とは『神與へ給ふ』と云ふ意味で、カザックが一緒に飲む時に遣ふ普通の挨拶) と云つた。

『San bul! (健康を祝す)』

とイエローシユカ小父は微笑みながら叫んで、自分の盃を飲み乾した。

『お前様あこれをお祭だと云ふだね。』と彼は立ち上つて窓の外を眺めながらオリエーニンに云つた。『こりや何てえお祭りだね。昔あどんな風に祝はうたかお前様に見せてえものだよ。おなごたちやあ金筋で一ぱい縫ひとりした晴着を着飾つて、胸のまはりにや二條の金貨をぶら下げ、頭にや金の髪飾りをつけて出て来たもんだよ。奴等が歩ると『フル、フル!』さ、何てえ音をしたか。どの女も此の女も、みんな姫さまの様だつたよ。歩るいて行く時にや、みんな一かたまりになつて、お前様等の胸が痛くなるまで歌をうたうて練つて行つたものさ。そして夜一夜飲み明しただよ。カザックたちは葡萄の酒樽を有りつたけ庭に轉がし出しては、そこに坐り込んで朝まで飲みつづけただよ。それからまた、みんなが手に手をとつて、珠子つなぎになつて、往來を村の端まで練り歩るいたものだよ。そして誰でも目つかり次第ひつばつて行つたものさ。さうだよ。かうして端から端まで練り歩

るいただよ。時にや三日も飲みつづけただからなあ。俺あ今も覚えてるが、俺の親爺なんか、眞赤になつて、おまけに服れ上つて、帽子もなけりや、着物をボロ／＼にして歸つて来るのがおきまりだつた。さうして歸つて来て、どんなに叱られた事かよ。母親は親爺をどんなに取扱つてえ、かよく辨へて居たもんだつた。母親は親爺の酔をさます爲めに冷てえ醃鰯と赤葡萄をあてがつといて、自分分は親爺の帽子をさがしに村ぢゆうかけすりまはつたものだよ。二日二晩しつかと飲みあかすなんて何てえことだらう! その時分の人間あ一體何てえ奴だつたらうなあ。だけどまあ、今時の奴等を見さつしやい!』

『それで? その晴着を着た娘たちは何んなだつたね。娘たちは娘たちだけで飲んだのかね。』とビレットキイは答へた。

『實際、さうしたよ! カザックが遣つて来て、馬を乗り入れて、娘たちの踊をふみにぢらうとしたりなんかしたよが、娘たちや又娘たちで、女の癖に棍棒を手にしたものだよ。何時かの乾酪週間の時だつたよ、ある若え猛者が娘どもを蹂みにぢらうとしたところが、娘たちはそれと喧嘩はじめて、馬をぶち、其男を打つちまつたよ。すると仲間が垣根を打壊してやつて来て、自分の好きな娘を掻つさらつて行つたよ。その時分の奴あこんな風に惚れたものだつたつて。お、何てえ娘たちだつたらう! まるで女王様だ!』

丁度この時、二人の馬に乗つた者が横町から廣辻場にやつて来た。一人はナザアルカで一人はルカアシユカであつた。ルカアシユカは、ピカ／＼とした絹のやうな前髪のある美しい頭を振り上げながら、固い道を軽々と濶歩して来た彼の肥えた栗毛のカバルダ馬に幾らか斜かひに乗つて居た。袋に入れた鐵砲を釣合よく脊に掛け、短銃を後方に、フェルトの外套を捲いて鞍の後にしぼりつけたところから見ても、ルカアシユカが何處か遠い戰場からでもやつて来たことがよくわかつた。馬に斜かひに跨つた見ればつた態度、鞭で馬の腹を殆んど聞える位に打つ手の氣輕な動作、そして何よりも、傲然とあたりを見まはす炯々たる黒い眼、それ等は凡て、若々しい力と自信とを意識して居ることを示して居た。

「何うだ、俺は豪氣な者だらう」と彼方此方と眺めながら彼の眼はかう要求して居るやうだつた。銀の馬飾りと武器とをつけた立派な軍馬と美しいカザックその者とがその廣辻場に集まつて居る凡ゆるものゝ注意を惹いた。瘠せて脊の低いナザアルカはその友達ほどには立派な服装をして居なかつた。二人が老人達の側を乗り過ぎた時、ルカアシユカは馬をとめて、すべ／＼と刺つた黒い頭の上高く、縮れた白い小羊の毛で縁飾りしたババハ帽をあけた。

「何うぢや、ノガイの馬澤山追つたかや。」と萎びた小さな老人がムツツリとした顰つ面で訊いた。

「うむ、數へ得ない位だつた、お爺さん。」とルカアシユカは横を向きながら答へた。

「何も彼奴をつれてまはるにや及ばねえぢやねえか。」と小さな老人はもつと顰めつ面して呟いた。

「なんだ畜生、何もかも知つてやがる。」とルカアシユカは呟いた。そして彼は困つたと云つた様な顔をした。けれどカザック娘の群の方に眼を向けると、馬をその方に進めた。

「今晚は、姉御たち。」と彼は急に馬をとどめながら力強い澄るゝばかりの聲で叫んだ。「俺の居ねえ間に、みんな婆あになつちまやがつたな、鬼婆たちが。」そして彼は自分のはしやぎ方に笑つた。

「あら、ルカアシユカ！ 御機嫌よう。」と澤山の嬉しさうな聲が叫んだ。「お前澤山お金もつてて？ 私達にお菓子買つて呉れるかい？……永く居ていゝのかい？……此前會つてからもう一年にもなるわ。」

「ナザアルカと俺とはほんの一時、飲みにやつて来たよ。」とルカアシユカは馬に鞭をあてゝ娘たちの方に眞直ぐに乗りつけながら答へた。

「そして此處に、お前をすっかり忘れたマリアンカが居るよ。」とウステンカはマリアナを脇でこづきながら金切聲で叫んで、キヤア／＼笑ひ出した。

マリアナは馬を退けて側に寄り、頭を仰向けて大きなピカ／＼する眼でカザックを眞直に眺めた。

「だけどお前は随分久しく來なかつたのね。何故お前は私達を馬で蹴とばさうとするのよ。」と彼女

は素氣なく答へて外方を向いた。

ルカアシユカはすつかり悦に入つて居る様だつた。彼の顔は勇氣と喜悅とで輝いて居た。だが、マリアナの冷たい答へは明かに彼をむつとさせた様だつた。彼は急に顔を擧げた。

「鎧に上れ、山へ連れてつてやらう。 mamochkei (おつかちやん) と彼は急に悪い考へを振り拂ひでもする様にして叫んだ。そしてジギツドの様に娘達の間を乗りまはした。それから彼はマリアナの方に屈んで云つた。『接吻をしてやらうぞ、それでも接吻をしてやらうぞ、それッ!』マリアナの眼は彼の眼に會つた。そして彼女は急に顔を赧めた。彼女はすつと彼を避けた。

「これ、氣をつけんかいな。あたしの足踏むわ。」と彼女は叫んだ。そして前屈みにかぐんで、飾のついた、きちんと合つた青い靴下と狭い銀色の打紐で縁どりした新調の赤い履物とを眺めた。

ルカアシユカはウステンカの方に向きかへつた。すると、マリアナは腕に赤ん坊を抱いて居る若いカザック女の側に坐つた。子供は娘の方に氣をひかれた。そしてその丸々とふとつた手で、娘の青い襦袢に垂れ下つて居る襟飾の糸を攪んだ。マリアナは赤ん坊の方にかぐんで、そしてその眼の端からルカアシユカを横眼に見た。その時ルカアシユカはチュルケスカの下、黒いベシユメットの衣袋から糖菓と種の袋とを引き出さうとして居た。

「これはお前たちみんなにやるんだ。」と云ひながら、彼はその袋をウステンカに渡し、口もとに微笑をたゝへてマリアナをチラと眺めた。

再びまた當惑の色が娘の顔に浮んだ。何かかう雲のやうなものが彼女の眼に表はれて來た。彼女は頭巾を唇の下まで引き落して、急にその唇を、まだ襟飾を攪んで居た子供の蒼白い顔にあて、熱情こめた接吻をし初めた。赤ん坊は若い娘の胸を押しやつて泣き初めた。口をあげて、齒のない齒眼を見せながら。

「お前さんはまあ赤ん坊の息をとめようてえのかい。」と母親は云ひながら自分の手に引きとつて、乳房を與へるために自分のベシユメットをあけた。『それより、お前さんはあの若い人とする方がいゝんだよ。』

「俺はこれから行つて馬を置いて來べえ、そしてナザアルカと二人で夜一夜飲みあかすだ。」とルカアシユカは叫んで、馬に鞭を加へ、娘たちのところから驅け出して行つてしまつた。

横町に歸つてから、彼とナザアルカとは並んで立つて居る二つの小舎に這入つた。

「もう晩飯すんぢまつてるよ、おい! 出來るだけ早く歸えつて來なよ。」とルカアシユカはその友に叫んで、戸口のところで馬を降り、内庭の折戸の方へ用心しいく馬をつれて行つた。

「やあ、ステープカー!」と彼は、これもやはりお祭の晴着をつけて居る啞娘が馬を連れに出て來たのを見て云つた。そして手眞似で馬を厩に入れて置く様に、けれど鞍をとつてはいけなと云ふこと

を知らした。

「啞娘は妙な聲を出し、舌をクウクウ鳴らしながら、馬の鼻に接吻をした。それは彼女が此の馬が好きで中々立派な馬だと考へて居ると云ふことであつた。」

「達者かい、阿母。何だつてー！ まだ出かけなかつたのかい。」とルカアシユカは鐵砲をおろして階段を登りながら叫んだ。

老母は彼のために戸を開けた。

「まあ、お前が来るとは思つてなかつたよ、そんなことあ、ちよつとも考へてなかつたよ。」と彼女は云つた。「だつてお前は来ないだらうつてキルカが云つたやももの。」

「酒を少しお呉んな、阿母、ナザアルカが来るだ。まあお祭でも祝はうかい。」

「いゝとも、ルカアシユカ、いゝとも！」と老母は云つた。「お前、女たちはみんなお祭に行つたぞへ、妾も啞つ娘と丁度出かけるところだつたやに。」

かくて彼女は鍵をとつて酪乳場の方へと急いだ。

ナザアルカは馬を繋いで鐵砲をおろしてから、ルカアシユカのところへ行つた。

三七

「健康を祝す！」とルカアシユカは赤葡萄酒のこぼれる程つがれた盃を母の手から受取つて、ソロソロと唇にあてながら云つた。

「何だか變だぜ。」とナザアルカは叫んだ。「あの老母ひよつとこ奴、馬をたんと盗んだかね。」つてきよあがつたおやねえか。彼奴うす／＼知つてるのに違えねえぞ。」

「魔法使奴！」とルカアシユカはブツキラ棒に云つて「それが何うしたんだい。」と頭を振りながら附け足した。「もう今時分彼奴等川を渡つたかも知れねえぞ。氣をつけろよ。」

「困つた事だな、何しろ。」

「何が困つた事だい。明日赤葡萄酒をちつとばかし彼奴に持つて行つてやれやい。さうすりやいゝんだ。何ともなりやしねえや。まあ、一騒ぎやらう、飲めやい！」とルカアシユカは、丁度イエローシユカ小父がその言葉を口にしたのと同じ儀な荒つほい聲で云つた。「さあ、往來へ出て娘達と面白くおかしくやつて來よう。お前行つて蜜を買つて來ねえか、それとも啞つ娘をやるかな。朝まで飲み明さう。」

ナザアルカは微笑んだ。

「そんなに長く此處に居れるのかい。」と彼は訊いた。

「何うだつて關ふもんかい。飛んでつてウオーツカ買つて來いやい。こゝに金があらあ。」

ナザアルカは温和しくそれに聽き従つてヤアムカのところに行つた。

イェローシユカ小父とイェルグシヨフとは、大きな肉食鳥のやうに、酒を飲んで居るところを嗅ぎ出しては、小舎を片つ端からあさり廻つてやつて来た。二人とも酔つて居た。

『もう半ガロン呉んな。』とルカは二人の挨拶に答へながら母に云つた。

『おい、白状しろやい、悪魔奴、何處で盗んで来た。』と老人は叫んだ。『お前は英雄だ、俺はお前が好きだ。』

『ところが、俺はお前を好かねえや。』とルカシユカは笑ひながら答へた。『お前は見習士官に女の取り持ちするんだつてなあ。何てえ爺だお前は。』

『そんな事あるもんか、そりや嘘だよ、ほんとに嘘だよ、へえ、マルカ。』老人は心から失笑してしまつた。『あん畜生奴、俺に取り入らうとしたよ、そして云つた。』さあ、あの女を俺に世話しろ。』つてな。彼奴。俺に鐵砲呉れようて云つたよ。だが、勝手にしあがれた。俺あ、さうしてやり度かつたが、お前の事思つてやつたよ。さあ、白状しろやい。何處にお前が居たよな。』そこで老人は鞣紐語を話し出した。

ルカシユカは陽氣に答へた。鞣紐語の知識に限りのあるイェルグシヨフは時々露西亞語を挿んだ。

『云つとくが、お前馬を盗んでたらう？ 俺あたしかに知つてるだぞ。』とイェローシユカは言ひ張つた。

『ギレイカと俺とが侵掠やつたのよ。』とルカシユカは言つた。そしてギレイ・ハンをギレイカと呼ぶことによつて、カザックによくある自分の豪氣を示さうとした。『彼奴あ何時も、河の向側の曠野ならすつかり知つてる、真直ぐにそこに行けるつて威張つてやがんだ。そこで俺等は馬に乗つて行つたのさ。暗い晩だつたよ。そしてギレイカの奴、途を間違ひやがつてな、氣をつけて行つたが駄目だつたのさ。村が何處にもねえぢやないか。で、つひそれでおしまひさ。もつと途を右へ行つたらよかつたんだな、俺等はさうして眞夜中までぶらついてたのさ。すると、急に犬の吠えるのがきこえたんだ。』

『阿呆ども。』とイェローシユカ小父が怒鳴つた。『そいつあ正しく、俺等が夜分草原で途を迷つた遣り方だよ。馬鹿にしてあがんなあ！ 一度俺あ、小さな小山に乗り上げて、繁つた藪ん中にかくれた事があつたつけ。丁度その手だよ。そして俺あ、その狼の啼いたのを覚えてるよ。』と彼は口に手をあて、一本調子で、狼の群の様に咆え立てた。『犬が直きにそれに應へたつけ。——だが、まあお前の話をしてしまへよ！ で、何うだつたんだ。』

『そりや面白かつたんだぜ。ノガイの女どもが、もちつとのとこでナザアルカをとつ捕まへるとこだつたんだよ。ブラッ！』

『さうだ、さうだつた。』とナザアルカは耻かしさうにして云つた。

『で、俺等はもつと乗り進めたんだ。ところがまたギレイカの奴、道をはづしてな、砂山ん中へ、』

全く迷ひ込んでしまつたよ。奴あテレクの方に下つてる事と思つてたんだが、實際は全くその反對だつたのよ。」

「星を目あてに行かにならんとこだつたよ。」とイエローシユカ小父は云つた。
「俺もさう思ふな。」とイエログシヨフは口を挿んだ。

「そりやそれに違えね、ところがその晩は全く曇つてたと来てらあ。兎に角、俺あ無暗に尋ねまはつたさ。そして牝馬一匹引つゝかまへたで、繩絆くつゝけたよ。それから俺あ、自分の馬を勝季に歩かせたね。俺あ心の中で思つたよ、「此奴がいゝ様に導れてつて呉れるに違えねえ。」つてな、それからお前たち何う思ふね。嘶くわ、嘶くわ、鼻を地面にくつゝけてな！そして真直に村の方へ駆け出して到頭歸えつて来たよ。だが運わるくもう全く夜が明けたで、俺等あやつとの事で馬を森ん中へ追ひ込んで、そこへ隠しとく事が出来たよ。それをナギームが河からやつて来て、連れてつたのよ。」
イエローシユカは頭を振つた。「うまくやつたなあ、本當だよ。澤山かい。」

「そこに居た奴ほみんなだ。」とルカアシユカは衣囊を叩きながら云つた。
此時年とつた母が小舎にやつて来たので、ルカアシユカは話をやめて「飲めよ！」と叫んだ。

「そいつあ全く、俺とギルチックのやつた違方だ。」とイエローシユカ小父は初めた。
「さあ、こんな事で愚圖々々しちや居られねえ。」とルカアシユカは云つた。「俺あ行くだ。」かくてルカ

アシユカは大盃の酒を飲み乾すと、帯を締めて往來に出て行つた。

三八

ルカアシユカが往來に出て行つた時はもう暗かつた。秋の夜は涼しくて風がなかつた。満月の黄金球は廣辻場の一方に立つて居る勳んだボブラの森の後から遊び出して来た。煙は酪乳場の煙突から、立ち昇つて、夕霧に溶け込み、村の上空に漂つた。燃えて居るキジャーク(乾糞)や新しい葡萄酒や温氣の匂が大氣のうちで雜り合つた、話聲や歌聲や種を砕く音が、晝間よりは明瞭しては居たが、同じ様な騒がしさを惹き起した。白い頭巾や羊皮帽などが、垣根や家の近くの群集のうちに見られた。

開け放たれた、そして明々と燈火のつけられて居る店々の前の廣辻場には、カザックの少年や少女の色々の群が集まつて居た。高い歌聲や笑ひ聲や、話聲などがきかれた。手を繋ぎ合つて、娘達は圓を造り、埃りつほい廣辻場を優雅な足どりで跳ねまはつた。その群のうちで一番醜い瘡せた女の子が歌つた。

森の中から、小さな暗い森から

(アイ、ダ、リウリ！)

お庭から、小さな縁のお庭から
 やつて来た。二人の若い勇士がやつて来た
 二人の若い勇士が、どちらも一人もの。

やつて来た。やつて来て、止まつて、喧嘩した。
 とまつて、喧嘩した。

その側を綺麗な女が通つた
 通つて二人に呼びかけた――

「これ、もし、妻や二人のどつちかに嫁くよ！」

それから女は好男子を選らんだ。

黄ろいちぢれ毛の好男子を。

男は女の右の手をとつて、

ぐる／＼連れて連れまはし、

仲間に女の自慢した。

「これ見る兄弟、俺の女を」

年どつた女たちは歌をきき、踊を見ながらそのぐるりに立つた。小さな男の子や娘たちは互に追つ
 かけこしながら闇の中を走りまはつた。カザックたちは立ちはだかつて、女たちが通りかゝると狐つ
 て見たり、時としては環の中にとび込んで踊の仲間入りをしたりした。戸口の暗い方の側にはジギツ
 ドの盛装をしたオリエーニンとビエレッキイとが立つて、自分達が注意を惹いて居るのを感じながら
 聲高くはないが明瞭と、佛語で話し合つて居た。赤いベシユメットを着た肥つたウステンカと綺麗な
 新調の衣裳を着た氣高いマリアナとが、手に手を取りながら走つて行つた。

オリエーニンとビエレッキイとは、何麼風にして此の二人の娘をホロヴード踊から誘ひ出さうかと相
 談した。ビエレッキイはオリエーニンがほんの只戀みにさうしようと思ふのだらうと想像した。けれど
 彼の本當の願ひは、彼女の唇から直接はつきりとした運命を知り度かつたのであつた。彼の不可抗
 の欲望は出来るだけ早く彼女と一人で會つて、凡てのことを告げ、彼女が自分の妻になつて呉れるか
 何うかを訊くことであつた。もつとも此問題はすつと以前からして自分で駄目だときめては居ながら、
 それでもなほ、自分の心のありつたけを彼女の前にさらけ出す勇氣をもたねばならぬ、さうすれば彼
 女は彼を了解するに至るかも知れないと思つて居るのであつた。

「何故もつと早く僕に云つて呉れなかつたんだ。」とビエレッキイは云つた。「さうすやり僕はウステ
 シカを通じて旨くやつてやつたのに。君は妙な男だなあ。」

『どうも仕様がなないぢやないか。何時か、直ぐにでも悉皆はなしてもいゝよ。だが、今はただ、何かして彼の女をウステンカのところへ連れて来て呉れ給へ。——後生だから。』

「よし。それは譯のない事だ……で、マリアナ、お前は好男子を選ぶかね、えゝ、そしてルカアシムカぢやいけないんだよ！」とビエツキイは禮義上マリアナに先き話しかけて叫んだが、その返事も待たないでウステンカの側に行つて、マリアナを連れて家に歸る様にと彼女をせめたてた。が、彼がまだ云ひ終らぬうちに、例の素朴な娘が他の歌を歌ひ出したので、娘たちの形造つてゐる環が再びまた動き出して歌ひ初めた。次がその終であつた。

お庭の後から、後から

若い勇士が彷徨ひ出で

街の端まで出て行つた。

初めて彼の來た時にや

右手で妾を手招いた。

二度目に彼の來た時にや

海狸のボンネット打ち振つた。

三度目はしかし

若い勇士は打ちどまり

止まつて振り向いて云ふ事にや

到頭會へて嬉しいな

まあ、俺の小言をきくがいい

何故、おゝ何故、俺のいとし娘よ

お庭を俺と歩くのを

なぜに厭がる？これいとし娘よ、

俺と話すを蔑しむか

やがてお前は、いとし娘よ

その傲慢を捨てらだらう

さうすりや俺は媒人遣らう

お前をもらひに媒人やらう

お前は俺の花嫁御

お前の涙ながさうー」

返事はちやんときめてたが
それでも何とも云へなんだ

「ハイ」とも「否」とも云へなんだ

お庭にそれから妾あ行つた。

縁のお庭でお友達に會つて

頭を低くさげました。

「これ、お少女、俺あこゝに居る

俺の手から頭巾をお取り

何うか娘よ受けとくれ、

白いその手にとつとくれ。

白いその手で持つとくれ。

取つて冠つて呉れ俺のために！

惚れてくれ、娘よ、俺に惚れてくれ

何うしてよいか思案が盡きも

俺のものだと俺の云ふ娘に

こんなに綺麗なシヨールをやらう

こんなに大きな肩掛故に

せめて五度は接吻させう

ルカアシュカとナザアルカとが環の中に割込んで少女達とグル／＼と廻り初めた。ルカアシュカは錆びた調子はづれの聲でみんなの歌に合せ、腕を振りながら、環の中に跳び込んで行つた。「誰か來な、つかまへろよ。」と彼は叫んだ。娘達はマリアナを衝き出した。けれど彼女は行かうとはしなかつた。歌ごゑの間々に、楽しさうな笑ひ聲や、平手打ちで叩く音や、接吻や、囁きなどが聞えた。

オリニーニンの側を通つた時、ルカアシュカは彼に愛想よく頭をさげた。

「ドミトリイ・アンドレエ井チー！ お前様もやつぱり見に来てるだね。」と彼は訊いた。

「あゝ、来て居るよ。」とオリニーニンはキッパリとブッキラ棒に答へた。

ピニレツキイはウステンカの耳許にかがみ込んで、何か云つた。彼女が返事をする間もなく、圓環がまはつて彼女をつれて行つた。けれど再びまた戻つて來た時、彼女は云つた。

「いゝわ、行くわ。」

「そして、マリアナもな。」

今度はオリエーニンがマリアナの上にかがみ込んだ。「来るかい？。来てお呉れ、ほんのちよつとの間でいゝから。少しお前に話さなきゃならん事があるんだ。」

「娘たちが行くなら、あたしだつて行くわ。」

「お前は、僕の訊いた事返事して呉れるかい。」と彼は又彼女に倚りかゝる様にして訊いた。「今日はお前、大變な御機嫌だねえ。」

此時にはもう、彼女は彼の前を離れて居た。けれど、彼は彼女について行つた。「返事してくれるかい。」

「返事するつて何を？」

「昨晚、お前に訊いた事さ。」とオリエーニンは彼女の耳にさゝりやきながら云つた。「僕と結婚するかつて事をよ。」

マリアナは暫らく躊躇らつて居たが、

「返事するわ。」と云つた。「今晚、返事するわ。」

そして暗闇の中で、彼女は喜ばしうな愛情のこもつた眼を青年に向けた。彼はなほも彼女について行つた。彼には、出来るだけ近く彼女の側にくつついて居る事が嬉しかつ

た。

けれど、絶え間なく飲んで居たルカアシユカが力一ぱいにマリアナの手を掴んで圓環のうちから眞中まで引きづり出した。その刹那、オリエーニンはやつとの事で彼女に「ウステンカのところへ来るんだよ、ね。」と囁く事が出来て、また友達のところへ戻つて来た。歌は終りを告げた。ルカアシユカは自分の唇を拭いた。マリアナも同じ事をした。そしてお互に接吻をした。「いや、五度やるだ。」と彼は云つた。話聲や冗談や喧嘩が調和のとれた運動や音に入り雜つた。だん／＼と酒で上機嫌になり出したルカアシユカは娘達の間に一掴みの菓子を分配した。「こりや俺がみんなに御馳走してやるんだ。」と彼は高慢な、おどけた様でもあり、感動して居る様でもある調子で叫んだ。

「だけど、兵隊等とぶらつき廻る奴等あ、仲間からおつほり出せよ。」と彼は急に叫んだ、オリエーニンを憎らしげに睨んだ。

少女たちは彼の手から菓子を引き掴んで、キャ／＼笑ひながら各自に奪ひ合ひした。ビレットキイとオリエーニンは一方の側に引き退つた。ルカアシユカは自分の寛大さに氣耻かしくでもなつたのか、帽子をとつて着物の袖で前額を拭いて、マリアナやウステンカのところにまざつた。

「俺と話を蔑しむか。」と彼は、丁度今まで娘たちの歌つて居た唄の一節を引いた。それをマリアナに當てはめながら云つた。「やがてお前は、いと娘よ。その傲慢を捨てるだらう。」と彼は非常に意

味あり氣に繰返した。「お前は俺の花嫁御、お前の涙流さよう。」かう彼は引用しながら、二人の娘を同時に抱へた。

ウステンカは自分の身を振り放して、腕を後方へ引いたかと思ふと、自分の手に負傷した程、彼の背を叩いた。

「これ、もう一踊りやるだかね。」と彼は訊いた。

「みんなの好きな様に。」とウステンカは答へた。「けれど私は歸るわ、そしてマリアナも一緒に行き度がつてるんだよ。」

カザックはなほマリアナを抱へたまふ、群から連れ出して家の暗い隅つこの後方に行つた。

「行くなよ、マーシエンカ。」と彼は云つた。「これから最後の楽しみをしようぢやねえか。家へ歸るよ、俺も行くから。」

「何で家へ行かにならんの。今日はお祭りよ、私は、思ひきり楽しまうと思ふわ。私はウステンカのとこへ行くよ。」とマリアナは云つた。

「いゝよ、何にしたつて、俺とお前と結婚するだから。」

「いゝとも！」マリアナは云つた。「まあ見とるがいゝよ。」

「何うしてもお前、行かうてえのか。」とルカシュカは要求した。そして彼女をシカと抱きしめて、

その頬にキスをした。

「さあ、私に行かしてくれ。何だつてお前はそんなにしつこくするの？」

そしてマリアナは彼の腕から身を振りはなして走り去つた。

「おい、こら！ 甚えぞ。」とルカシュカは立ち停つて頭を振りながら、非難する様に叫んだ。「歌の一節」俺のことでお前は泣くだらう。」と彼は彼女から振りかへつて、他の娘たちに叫んだ。「何か歌へ

よ、なあ、おい。」

マリアナは彼の云つた事で幾らか驚かされると同時に、當惑した様に見えた。

彼女はとどまつた。

「何が悪いの？」

「手前の仕草がよ。」

「だつて、どんな事？」

「わかつた事つた。手前のとこの兵隊の下宿人といちやつきあがつて、俺なんかにや見向きもしね

えぢやねえか。」

「お前さんに惚れようが惚れまいが、妾の勝手さ、お前さんは私のお父ッあんぢやあるまいし、また阿母さんでもあるまいし。お前さんは何うしようてえんだね。私や自分の好きな人に惚れるよ。」

『よしッ。』ルカァシユカは云つた。『よく覚えてろよ。』

彼は店に行つた。『みんな』と彼は叫んだ。『何でお前たちは立つてるんだね。も一つホロゾード踊れよ。ナザアルカー！ 急いで行つて赤葡萄酒買って来てくれろよ。』

『どうだね、やつて来るかね。』とオリーニンはビレットキイに訊いた。

『直き来るだらう。』とビレットキイは答へた。『來給へ舞踏會の準備をしなけりやならん。』

三九

オリーニンがビレットキイの小舎を出て、二人の娘の後に踐いて行つたのはもう夜遅くであつた。マリアナの白い頭巾が暗い往來に閃いた。金色の月が曠野の方に沈みかけて居た。銀色の霧が村の上に漂つて居た。全く寂然として窓に光はなかつた。きこえる音はたゞ、急ぎ行く娘たちの足音ばかりであつた。

オリーニンの心臓はひどく打つた。濕つほい空気が彼のほてつて居る顔に冷々とあたつて氣持ちよかつた。彼は空を眺めた。また、今出て來た小舎を眺めた。蠟燭が丁度吹き消されたところだつた。そして今一度彼の注意は、影のやうに急いで歩いて居る若い女達に惹かれるのだつた。白い頭巾は霧の中にかくれた。彼にとつては、獨りで残される事が恐ろしかつた。それ程彼は幸福だつた。彼は

階段から跳び降りて娘たちの後を追つた。

『おや、お前さんなの？ 誰かに目つけられますよ。』とウステンカが叫んだ。

『構やしないよ。』

オリーニンはマリアナのところに行つて、腕を彼女に捲きつけたが、彼女はそれに抵抗しなかつた。

『どつちも接吻するんぢやないのよ。』とウステンカは云つた。『先き結婚しなさいよ、さうすりや接吻をしてもいゝわ。今は落着いて居るものよ。』

『左様ならマリアナ、明日僕はお前のお父さんとこへ行つて話すつもりだ。お前は一言も喋つちやいけないよ。』

『喋るもんですか。』とマリアナは答へた。

二人の娘は急ぎ去つた。

オリーニンは獨りで歩いた。そして、今まで行はれた凡てのことを考へて見た。彼は一晩ぢう彼女とたつた二人、きりで暖爐の傍に居た。ウステンカは、ビレットキイや他の娘たちと一緒に湧き立つ様な騒ぎをやつて居た部屋から、一度も出て來なかつた。オリーニンとマリアナとは小聲で何か囁き合つて居た。

「お前は僕のものになつてくれるかい。」と彼は彼女に訊いた。

「嘘だわ、あんたは私なんか欲しくないわ。」と彼女は冗談の様な調子で、しかし落着いて答へた。

「だが、お前は僕を愛して呉れるかね。え、何うだね？」

「愛さないなんて事あるもんですか、あなたは片輪ぢやなくてよ。」と彼女は微笑みながら答へて、自分のガサ／＼した両手に彼の手を握りしめ、そして「何て白——い、白——い手なんだらう、まるでチイスみたいに柔かくてよ。」と云つた。

「僕は戯談云つてるんぢやないよ。云つてお呉れ、お前は僕のものになつて呉れるかね？」

「ならないなんてあるもんですか。お父さんさへ承知なら。」

「ねー お前が若し本當のこと云つてるんぢやないなら、僕は氣違ひになつてしまふよ。明日お前のお父さんと阿母さんに云つて、儀式はすつかり済ましてしまはふ。」

マリアナは突然心から笑つた。

「何だね。」

「あんまり可笑しくつて。」

「本當だよ。僕は菜園と家とを買ふつもりだ。そしてカザックになるよ……。」

「ぢやあ、氣をつけていらつしやい、あんたは他の女なんか言寄つちやいけなくてよ。そんな

事したら私怒るから。」

オリエーニンは今や、凡て此の會話を思ひ出して非常に嬉しかつた。それを考へると、或時は胸に痛みを覺えたが、やがて又喜びで一杯になつた。その胸の痛みと云ふのは、彼女が彼と話して居ながらあんまり落着き拂つて、而も嬉しさうにして居たと云ふ事のためであつた。それは恰かも、少しも彼女が此の新しい事情の下にも心を打たれてないかの様に見えた。彼女は彼の言葉を殆んど信じて居なかつた。そして將來の事なんか少しも考へては居なかつた。彼女はたゞ一時的の愛着を彼に感じただけで、將來の事を考へる時にも彼の事なんかは眼中に置いてないかの様に彼には見えた。けれどまた、彼女の言葉と云ふ言葉は、凡てみな彼には本當である様に見えた事と、彼女が彼のものになると云ふ事に同意したと云ふ事からして、喜びが湧いて來た。

「さうだ」と彼は自分に云つた。「彼の女が自分のものになり切つた時のみ、吾々はお互に了解し合ふんだ。そんな戀には言葉なんか要りやしない。要るのは生命だ、而も全生命だ。明日は悉皆もう了解つてしまふだらう。俺はもはや是以上こんな風には生きて居られない。明日は何もかも彼の女の父に話してしまはふ。ピエレッキイにも、村ぢゆうにも……。」

ルカフシカは二晩も眠らないで、生涯のうち初めて本當に酔つてしまつたと云ふ程華々しく祭祀を祝つた揚句、ヤームカのところへ寢込んでしまつた。

整る日オリューニンは平常より早く起きた。そして目覚めて第一に考へた事は、これから先き何うなるのだらうと云ふ事であつた。彼は、彼女の接吻や、ガサ／＼した手の壓力や、「何て白い手をして居るんだらう。」と云つた彼女の言葉などを思ひ出して嬉しかつた。

直ぐにも旗手とウリトカ夫人との所へ行つて、マリアナに結婚を申込むつもりで、彼は起き上つた。まだ日の出前であつたが、往來に時ならぬ大騒ぎが起つて居るのに彼は驚かされた。——走る音、馬の騒げる音、叫ぶ聲。彼はチェルケスカを引つかけた。そして玄關に出て行つた。

旗手の家の者はまだ起きてゐなかつた。

五人の騎馬のカザツクが昇奮した口調で話しながら、往來を驅けて行つたり來たりして居た。

その先頭には、大きなカバルタ馬に乗つたルカアシカが居た。カザツク達はみな聲の限りに話したり叫んだりして居た。どんな事件が起つたのか見當がつかなかつた。

『上の宿驛を攻撃するんだ。』と一人が叫んだ。

『馬に鞍をつけて早く一緒になれ。』と二人目の人が叫んだ。

『此門から行くと一番近い。』

『此方へ來い。』とルカアシカは叫んだ。『中門から出發せにやららん。』

『あゝさうだ、そりや此門からよりや近い。』と塵埃を一ぱいに浴びて、汗みづくの馬に乗つて居る今一人のカザツクが云つた。

ルカアシカの顔は前の晩の酔ひ過ぎで赤らみ、脹れて居た。小羊皮の帽子は頭の後方の方に載せられて居た。そして彼は、さながら自分がその司令官でもある様に、絶對的な命令をして叫んだ。

『何だね。何處へ行くんだね。』とオリューニンは、カザツクの注意を惹くのに幾分困難ではあつたが、かう訊いて見た。

『アブレタの奴等捕りに行くだ。葦の中までやつて來やがつてるだよ。俺等あ直き出かけるだが、澤山の人数がねえだ。』

それでも尙カザツク達は叫びつゝ、新勢を集めながら、往來を馬で驅けて行つた。

後に止まつて居ては好くは思はれないだらうとオリューニンは思つた。とは云へば、早く歸つて來ようと思つた。着物を着て、鐵砲に彈丸をこめ、ワアニュシヤが鞍を置いた馬に乗り、今まさに村を乗り出さうとして居たカザツク兵の間は、カザツクたちは、そんな急な場合だのに馬から降りて圓を造つて立ち、持つて來た桶から木の盃に注ぎ込んだ赤葡萄酒を飲んで居た。彼等はそれを廻して、遠征の成功を祈つた。

その間に一人の、偶然この村に來合せたダテ者の若い旗手が居た。そして、そこに集つて居る十人のカザツクの指揮を引き受けた。彼等は皆たゞの兵卒であつた。そして、この旗手が力をつくして指揮官らしい風を装はふとしたけれど、彼等はルカアシユカの指圖を待つた。彼等はオリエーニンには絶対に注意を拂はなかつた。みんなが再び馬に乗つて出發した時に、オリエーニンは若い旗手の側に行つて何んな事件が起つたのかと訊いた。自稱士官は法外な追従をもつて、こんなに階級の高い人と一緒になる事を何んな光榮に思つて居るかと言ふ事を彼に感知さうと努めた。みんながこれから何をしようとして居るかと言ふ事を彼から聞き出すのは容易な事ではなかつた。

アブレク人を探さしにやつた斥候たちが、村から八露里ばかり隔つた低地に、數人の山人を發見したらしかつた、アブレク人等はある沼地に潛伏して居たが、鐵砲を放つて、生きながらには決して降伏しないと云ふ意氣込みを見せたのだつた。

二人の人と共に斥候隊を組織して居た軍曹が、アブレクを見張るために後に残つて、援兵を求むるために一人のカザツクを村へ遣つたのだつた。

太陽は丁度昇りかけて居た。村から三露里ばかり行くと、曠野は凡ゆる方向に擴がつて見えた。そして單調で憂鬱な砂の荒地の外何者も見えなかつた。その砂の上には、家畜の足跡が印せられて居り、凹地には萎れた草や低い燈心草などが一ぱいに掩ひかぶさつて居て、此處其處に道があるにはあるが

殆んど跡をつけられない位であつた。そして遠い／＼地平線上にはノガイ人の住家が立つて居た。何處を見ても蔭になるところとしては更になく、一面はたゞ不毛の乾燥地であつた。

太陽は常に、赤い球となつて曠野の上に昇つたり下つたりする。風が吹き出すと、砂の山をすつかり持ち運んで來る。恰度この朝のやうに靜な時には、運動や音によつて掻き亂される事のない靜かさが著しく感じられる。此朝は、太陽が昇つた後ですら、この全曠野に亘つて全く靜穩で寂寥だつた。空虚と倦怠との、一種特別な感じがそこにあつた。

空氣はそよともしかつた。音と云ふ音はたゞ馬の驅ける音と嘶く聲ばかりであつた。而もこれ等の響きでさへ少しの反響もなく、直ぐと消えて行つてしまつた。カザツクたちは殆んど黙り勝ちで馬を駛らせた。そしてガチャ／＼云つたり、ガタン／＼云つたりしない様な風に武器を持つて行つた。武器をガチャ／＼させる事はカザツクにとつては甚しい不面目なのである。二人のカザツクが村から馬を驅けてやつて來た。そして二言三言何か云ひかはした。ルカアシユカの馬が躓いたのか、草にまづはつたのか、前方へ衝き進んで行つた。

カザツクの間では、それが凶事の前兆である様に思はれて居る。

彼等はあたりを見廻はしてから途を急いだ。そして、こんな時に起つた何か特別の意味のありさうな事情には注意を向けまいと努めた。ルカアシユカは急ぎ手綱を引いて、フンと云つた様に顔をしかめ

齒を喰ひしばつて、鞭を頭の上でならした。彼の美しいカバルダ馬はどの足で歩いているかわからないやうに、そして空に飛び上るために翼が欲しいと云つた風に急に四肢で踊り上つた。ルカアシュカは一度ならず、二度、三度も馬の肥えた腹の下に鞭をあてた。カバルダ馬は齒を露き出し、尾を振りそして嘶いて、腰で立ちあがり、それから隊の他のものを後に残して躍進して行つた。

「ひよう！ 立派な馬だ！」と若い旗手が、特にいゝ馬だと云ふ意味を含んで居る露西亞語を用ひて云つた。

「軍馬のうちの獅子だよ！」ともつと年上のカザツクが答へた。

カザツク達は、時には緩々と、時には驅走で、しかし始終無言のままに馬を進めた。で、この事は、暫時の間彼等の行動の沈黙と嚴肅とを破つた唯一の事だつたのである。

八露里の里程の間、この曠野の全面にわたつて彼等の出逢つた生きものとしてはたゞ、一露里彼方の曠野をゆる／＼と過ぎて行く二輪の小馬車の上に張られた、ノガイ人のキビトカ即ち遊牧の天幕だけであつた。それは、家族をつれて一つの住地から他の住地へと動いてゆくノガイ人であつた。彼等はまた或る穴の中で二人の頬骨の高い、襜褕着のノガイの女たちに逢つた。その女たちは脊に編籠を負ふつて、曠野でキジャークにする動物の糞を集めて居た。破格なノガイ語を話す若い旗手は、此等の女たちから何か知らうと努めたが、彼等は彼の云ふ事がわからなかつた。そして何か害をされるの

ではないかと心配して居るらしく互に見かはした。

ルカアシュカは馬をその側に進めて止めながら、快活な聲で、彼等が常に取り交はして居る挨拶をした。するとノガイの女たちは、嬉しさをかくさうとせせずに、自分達の兄弟とでも話すやうに心安く話し出した。

“Ai, ai kop abrek!” と彼等は、カザツク兵たちが馬をすゝめて居た方向に指示しながら悲しさに云つた。オリエーニンは勿論、彼等が「澤山のアブレク」と云つて居るのだと云ふ事をよく承知して居た。

イエローシユカ小父の話から一通りの觀念だけを得て居たが、實際にそんな行動を目撃した事がないので、彼は何うかして、カザツクの後に従って行つて全ての事を知つて置きたいと思つたのである。彼はカザツクたちを賞讃した。彼は眼を圓く開け、耳を聳て、注意して観察を怠らなかつた。で、彼はサアベルを持ち、鐵砲を肩にしては居るが、カザツクたちから大分かけ離れた處に居るのに氣がつくと、彼等と行動を一緒にはしまいと決心した。その理由は、彼の考へでは、彼はもう十分に、要塞の遠征に於て自分の勇氣は示されて居ると思つたからである。而ももつとそれよりも本當の理由は、彼は今非常な幸福を得て居るからであつた。

突然、かなり遠いところで銃聲がきこえた。

若い旗手は昂奮して来た。そして、どんな風にカザックたちがその軍勢を分つべきか、又何の側に彼等が馬を進むべきかと云ふ事に就いて命令をし初めた。

しかし是等の命令に服従しようとする氣の少しもないカザックたちはたゞ、ルカアシユカの云ふ事のみ耳を傾け、彼の方をばかり見て居るのであつた。ルカアシユカの顔や身體全體の風つきは落着き拂つて勝ち誇つてる様に見えて居た。彼は他の馬などが逆でも従いて行けないと云ふ事のわかつて居る彼のカバルダ馬に乗つて、斥候隊を率ひ、そして眼をしばたきながら前方を眺めて居た。

『あそこを一人の騎兵が行く。』と彼は、馬を控へて、皆の者の列にまで戻つて來ながら云つた。

オリエーニンは眼を睜つたが何も見えなかつた。カザックたちは素早くも二騎を見出して、傍目もふらずその方に驀地に馬をすゝめた。

『あれはアブレクかね。』とオリエーニンは訊いた。

カザックたちは、自分にとつて可笑くてたまらない此の間には答へなかつた。此方の方へ馬を駛らせて來るアブレクがあつたなら、それこそ餘程馬鹿なアブレクに相違ない。

『ありやローヂカ小父が呼んでるのに違えねえや。』とルカアシユカは、今やもうはつきりと見えて來た二人の騎者を指示しながら云つた。『見ろ、こつちへ遣つて來るから。』

實際、數分の後には、この騎者たちはカザックの斥候隊である事が明白として來た。そこで軍曹はル

カッの方に馬を寄せつけた。

四一

『餘ッ程遠いかね。』と云ふのがルカアシユカの簡單な問であつた。

この途端、三十歩も隔つて居ないところで、鋭い銃聲がきこえた。軍曹は口もとに微かな笑ひを浮かべながら、『グールカの奴、メツタ撃ちに撃つて居やがる。』と云つて、その銃聲の方に頭をうなづかせた。

なほ五六歩行くと、グールカが砂丘の後方に蹲つて銃に弾をこめて居るのが見られた。グールカはほんの退屈しのぎに、これも向ふの砂丘に隠れて居るアブレク共を射つて居るのだつた。

その方からやつて來た一發の彈丸が彼等の上をブーンと云つて通つた。旗手は着ざめてどきまぎした。ルカアシユカは馬から降りて、手綱を一人のカザックに渡して置いてグールカのところへ行つた。オリエーニンも彼のやる様にして、身を屈めながら彼について行つた。彼等がグールカと一緒に砂丘の後方に達するか達しないかのうちに、二發の彈丸が彼等の頭の上を掠めて通つた。ルカアシユカはオリエーニンを見てニコツと笑つて頭を下けた。

『撃たれますぜ、アンドレイチさま。』と彼は云つた。『あつちへ行つて居なさるがえゝだ。お前様の居

なざる場處ぢやねえだ。」

けれどオリエーニンはなほ何うかしてアプレクを見たいと思つて居た。

砂丘の後方、二百歩ばかりの彼方にあたつて、帽子と小銃とを彼は認めた。突然烟がブツとそこら立つた。そして弾がまた掠めて通つた。

アプレクは小山の麓の沼地に居た。オリエーニンは彼等の選んだ場所に驚いた。そこは曠野の他のところと別に變りはなかつた。しかしアプレクどもが其處に潜伏したと云ふ事實は其處を他の凡ての場所とは違つたものにさせ、ある特殊な性質をもつたもののやうにした。のみならず、そこそはアプレクの伏兵の居なければならぬところの様に彼には思はれた。

ルカアシユカは自分の馬に歸つた。オリエーニンもその例に倣つた。

「枯草積んだ小馬車をもつて來ねぢやなんねえ。」とルカアシユカは云つた。「さうでもしなきや殺られるぞ。向ふのあの小山の後方にやもう、ノガイの奴等の積んだのが一つ立つてらあ。」

旗手は彼の言ふ事に耳を傾けた。軍曹はそれに賛成した。枯草車が持つて來られた。そしてカザツクたちはその後方に隠家を求めて、前へ〜と押し進めた。

オリエーニンは小山の上に馬を登らせて、その頂上から全體の光景を一目に見た。枯草の車が前へ進んだ。カザツクたちはその後方に歸つてチエチエ人の方へと車を押した。九人のチエチエ人は膝と

膝とをつき合せて一列になり、鐵砲を發射する最後の瞬間を待つて居た。

暫くは全くおし靜まつて居た。が、俄然としてチエチエ人の側からして、何うもイニローシユカ小父の Ai-dai-dalai の頭に似たところのある悲しい歌の、ききなれない響きが起つた。もう逃れる道のない事を知つて居た山人たちは、逃れようとする心を追ひ拂はふとして、お互の膝と膝とを紐で結びつけて置いて、何時でも鐵砲を發射つことの出来る様に手にしながら死の終をうたつて居たのであつた。

カザツク達は枯草車を押し進めながら段々と近づいて行つた。オリエーニンは射撃の起るのは今か〜と待ちかまへて居たが、沈黙はただアプレクの悲しい歌によつて破られたばかりであつた。が、また遽に歌が止んで、降り注ぐ様な鋭い銃聲が鳴り響き出した。一つの彈丸は枯草車の軸の中に打ち込まれた。チエチエ人の誓言や叫喚の唸り聲がきこえた。一發は一發と彈丸が枯草車に降り注いだ。が、カザツク達はまだ射ち返さないで、山人たちからたつた五歩ばかりのところまで進んで行つた。今一ときが過ぎた、カザツクは関の聲をつくつて車の兩側から跳び出した。ルカアシユカがその先登に立つて居た。銃聲や叫喚や呻き悶える聲などの多になつた響きを、オリエーニンはきいた。彼は烟や血を見た様に思つた。馬を乗捨てて、全く我を忘れて、彼はカザツクの方へ走つて行つた。恐るべき事が彼の眼にうつつた。彼はそれをすつかりとは認める事が出来なかつた。がもう事は既に終つ

た事が分つて来た。ルカアシユカは敷布の様に蒼ざめ、傷いた一人のチエチエン人の腕を掴んで、「此奴殺すぢやねえ、殺すぢやねえ、俺は此奴を生捕りにするだ。」と叫んで居た。

それはルカアシユカの殺したアブレクの兄弟で、死體を取りに来た、あの赤毛のチエチエン人であつた。ルカアシユカは彼の腕を振りつけて居た。

思ひがけなくそのチエチエン人は自分の身をもぎとつて短銃を放つた。ルカアシユカは倒れた。血がその横腹からバツと飛び散つた。彼は跳び上つた。けれどまた露西亞語と鞆語で咄ひながら倒れた。血は益々彼の上にも下にも流れた。カザツツクたちは彼の援けに急いだ。そして彼の帯を解き初めた。そのうちの一人のナザアルカはルカアシユカを介抱する前に、劍をその鞘に入れるのにかなり困難した。又血が滴つて居た。

口髯を短く刈り込んだ赤毛の山人たちは、殺され、すたく／＼に斬られて斃れて居た。ただ一人、ルカアシユカを射つた者ばかりが、ひどく怪我はして居るが生き残つて居た。此の男は、力のなくなつた鷹のやうに、血だらけになつて、血は右の眼の下からタラ／＼垂れて居た。齒を喰ひしぱり、蒼ざめて死に者狂ひに、大きな腹立たしい眼であたりを睨みまはしながら、踵で踏つて劍を持ち、最後まで自分を衝らうとして居るらしかつた。旗手が彼の方に行つた。そしてその側を通り過ぎようとして居る様に見せかけながら、素ばやく短銃を彼の耳に射ち込んだ。チエチエン人は前方に躍り出さうとした。

けれどそれはもう遅かつた。彼は斃れた。

カザツクたちはみな呼吸をはい／＼させながら、死體を引き出して掠奪した。これ等の赤毛の山人たちはみな何れもこれも一個の丈夫であつた。そして皆それ／＼特長のある表情をして居た。カザツク達はルカアシユカを小馬車に運んで来た。ルカアシユカは露西亞語と鞆語で罵りつづけて居た。

「嘘つき奴！ 呼吸の根とめて呉れるぞ！ 俺の手から逃がすものか。アンナ・セニイ！」と彼はなほも蕩擻きながら叫んだ。けれど、聽て間もなく彼も衰弱のために黙らなければならなかつた。

オリエーニンは家の方に馬を駛らせた。その晩彼は、ルカアシユカが死にかけて居るが、河向ふから来た一人の鞆語人が薬草の力で彼を助けることに同意したと云ふ事をきいた。

幾つかの死體が役場に運ばれた。女たちや子供たちはそれを見に群をなしてそこに集つて行つた。オリエーニンは夕方歸つた。そして可なり時を終て初めて、自分の見た光景の明白とした印象を得る事が出来た。けれど夜になつてから、前の晩の思ひ出が洪水のやうにやつて来るのを覺えた。彼は窓から外を眺めた。マリアナは何か仕事をするために家から小舎の方に行くところだつた。彼女の母は葡萄島に行つて居た。父は役場に行つて居た。オリエーニンは彼女が仕事を終へるのを待たないで彼女の居るところまで出て行つた。彼女は小舎の中で、彼に背を向けて立つて居た。オリエーニンはそれを、女の度みだと思つた。

「マリアナ！」と彼は云つた。「これ！マリアナ、這入つてもいゝかね。」
急に彼女は振りかへた。その眼には涙の跡がある様に見えた。彼女の顔には愛らしい憂愁があつた。
彼女は黙つて威丈高に彼を眺めた。

オリエーニンは云つた。

「マリアナ！ 僕が来たんだよ……」

「およし！」と彼女は云つた。彼女の顔は變らなかつた。けれど涙が眼に湧き溢れた。

「何でそんなに……？ 何うしたんだね。」

「何です？」と彼女は破格な、傷ましい聲で叫んだ。「カザックが五六人殺されたの、それが悲しい

のよ。」

「ルカフシユカがかい。」オリエーニンは訊いた。

「行つて下さい。何の用の？」

「マリアナ！」オリエーニンは彼女に近よりながら叫んだ。

「どんな事だつて私やお前さんにしてあげないから！」

「マリアナ、そんな事を云ふもんぢやないよ。」とオリエーニンは懇願した。

「行つてしまへ、耻知らずの獸物奴！」と娘は地團太を踏みながら、そして彼を威嚇する様な身振

りをしながら叫んだ。そして、オリエーニンが急に、もう望みが絶えたと言ふ事、今迄にも長い間考へて来た、彼と彼女との間の隔りと云ふものが、疑ふ事の出来ない眞理であると云ふ事を悟つた程、蔑みや憤りの表情が彼女の顔に表はれて居た。

彼は答へをしなかつた。そして立つて居る彼女をそこに残したまゝ立ち去つた。

四二

自分の部屋に歸ると彼は、二時間も身動きもせず寝床の上に横はつて居た。が、やがてまた中隊長のところに行つて、本部分になつて此處を去る事を願つた。

彼は誰にも別を告げず、ワアニュシヤを通じて旗手との勘定をすまし、聯隊の駐屯して居る哨兵線に向つて出發する用意をした。

イエローシユカ小父が彼を見送りに来た唯一の人であつた。彼等は家に這入つて、一緒に飲みつぎた。彼がモスクワを去つた時と全く同じに、貸馬車が戸口に待つて居た。けれど今度は、オリエーニンはその時のやうに自分のことを勘定したり、自分の考へたり仕たりした事は凡て間違つて居たと自分に告げたりなんかしなかつた。今度は最う新しい生活を自分に約束しなかつた。彼は益々マリアナを愛した。けれどもう彼女に愛される事は決して出来ない事だと云ふ事を知つた。

「ぢやあ、左様なら、お父つあん。」とイエローシユカ小父さんは云つた。「お前様あ前哨に行くだな、働巧にこなせえよ、老人の云ふこと聴きなせよ。侵掠だとか、そんな事の仲間入りをする様な事のあつた時にあやな、——なあ、俺あ古狼だ、そんな事あすつかり知つとる——それとも射撃でも行はれとる時にやな、そんな時にや、澤山寄つてる塊のところにや行きなさんなよ。何時でも此手なんだ。みんなが怖氣をさすと一緒に寄りかたまるんだ、そして此處に塊つてると大丈夫だと思つてるんだ。だけど其奴あ一番いけねえだ。狙ふところは何でも塊りだでな。俺あ何時でも出来るだけみんなと離れて居て、一人で行つたもんだ。俺の怪我しなかつたなあその爲めだよ。俺あ若い時にや何でも見て来ただよ。」

「そりやさうだが、背中に弾丸を負うてるぢやないか。」と隣の室で荷造をして居たワアニユシヤはあてつけて云つた。

「こりやカザックの悪戯だよ。」とイエローシユカは答へた。

「カザックが何うしたと云ふんだね?」

「そりやかうなんだ。俺等あ飲んで居ただな。すると、ワニカ・シトキンてえカザックがな、つぶく〜に酔ひあがつて、不意に俺にピストルを射撃ちあがつたんだ。ところが、そいつがうまく適中りあがつたのよ。」

「で、傷を負はせたかね?」とオリエーニンは訊いた。「ワアニユシヤ、もう用意は出来たかね。」と彼は附け足した。

「やあ! 何でお前さま、そんなに急ぐだね、まあきゝなせえ……さうだ、彼奴が俺を撃つた時、弾丸が骨を砕かねえで、そのまゝとまつてしまつただよ。で俺あ云つたのよ。『いゝか、手前は俺を殺しただよ、兄弟、わかつたか? 手前は俺を何うしようつてえんだ。俺あ斯うして手前と別れ度かねえよ。さあ、一ガロン持つて来な!』てな。」

「で、傷がついたかね?」とオリエーニンはまた、此話には殆んど耳を借さずに訊いた。

「まあ聴きなせえ! 奴、俺に一ガロンの酒よこしあがつただよ。そこで俺等あそれを飲んだだね、だが血は始終出つづけだ。で、部屋ぢゆう一ぱいの血よ。ブルラクの爺さんの言ふことにや、『やれ此の若衆もこれまでぢや。甘いウオーッカをもう一シユトフ持つて来てやんな、さうすりやお前の罰も帳消しだ。』つてな。彼奴等あまたもつと持つて来ただよ。飲んだわ、飲んだわ……」

「ふむ、痛かつたらうね?」とオリエーニンはもう一度きいた。

「何うだつていゝぢやねえかね、邪魔するぢやねえよ。俺あそんな事あ嫌えだ。まあ終りまで話させるだよ。飲んだわ、飲んだわ、朝までつづけただよ。そして俺あ、死んだやうに酔つて煖爐の上に眠つちまつただよ。翌る日眼がさめても、身をのばすことも出来ねえ始末さ。」

「ひどく痛かつたかね？」とオリエーニンはまた、こんなに幾度も訊く質問には答へるだらうと思ひながら云ひはつた。

「痛えなんて云つたかね、いや痛かなかつた、たんだ、背のびをする事も歩く事も出来なんだばかりよ。」

「それでも、お前はまだ生きのびたんだ。」とオリエーニンは笑ひの跡方も見せないで云つた。それ程、彼の心は重かつた。

「さうだよ、俺はまだ生きのびてる。けれど弾丸はまだ今日に至るまで残つてるよ。觸つて見なせえ。」かう云つて彼は襦袢を折返して固い背と、背骨との近くの、弾丸の這入つて居る傷跡を見せた。

「ぐる／＼動くのがわかるかね。」と、彼は、何か不思議な玩具かなんかの様に此の弾を面白がつて居るらしくして云つた。「それ、後の方へ動いて行くから。」

「何うだね、ルカフシカは生存かと思ふかね。」とオリエーニンは訊いた。

「さうさねえ、そりやわかりやしねえ。醫者がまだ来て居ねえでな。迎へにやつちやああるかね。」

「何處から迎へて来るんだね、グローツナヤから？」とオリエーニンは訊いた。

「ちやねえ。お父つあん。俺が若し皇帝だつたら、お前様等の露西亞醫者をみんな絞首にしてやる

だよ。彼奴等の知つてるなあただ、滅多切りに切る事だけだよ。そんな風にして奴等あカザックのバクラシエフを片輪にしてしまつただよ——奴の脚を切断りあがつてな。彼奴等あ馬鹿だよ。バクラシエフにしちや、今何のいゝ事があるもんかね。何にもありやしねえよ、お父つあん。けれど山にや醫者がある、それこそ本當の醫者だあね。俺の乳母のウォルチカの時だつてさうだつたよ。ある時遠征中に胸の此處んとこに怪我しただよ。するとお前等の醫者等は手を放しただが、サイブてえ奴が山から来て直しただよ。藥草に限らあね。お父つあん。」

「そんな事云つたつて仕様がな。」とオリエーニンは云つた。「それよりも僕が本部から軍醫をよこさう。」

「仕様がな？」と老人は彼の口調を真似しながら繰返した。「馬鹿な！ 馬鹿な！ 仕様がなえ！ 軍醫を寄越す！ さうだよ、お前さん達の軍隊が醫したよめしがあつたなら、カザックもチェンも醫して貰えに行かうがの、ところがそいつあ出来ねえ、そこでお前様らの士官たちも隊長たちも山から醫者を招んで來らあね。お前様等の學問てえ奴あ、ありや全く嘘だよ。お前様等のものと來たら何から何までみんな嘘でかためてるだよ。」

オリエーニンは彼に答へようとしなかつた。それは、彼が今まで住んで來た、またこれからそこへ歸らうとして居るその世界に於ては、凡てが虚偽であると云ふ、彼の意見と餘りに一致して居たから

である。

「だが、ルカアシユカは何うだね。見て来たかね。」と彼は訊いた。

「奴あ死人の様にして寝て居らあね。奴あ何も食ひもせにや飲みもしねえ。吐き戻さねえなあウオ
ーツカばかりだよ。まあ、奴がウオーツカを飲めるなら、何でもねえかね、だが、奴あ可哀想だよ。
奴は立派な若者だつた。丁度俺のやうなジギッドだつた。さうだ、俺あ丁度あんな風に一度死にかけ
たもんだ。婆さん達あもう俺を墓穴へ埋めるつもりにして居ただよ。どんなに甚い熱が俺の頭にあつ
たらう！ みんなは俺を聖像の下に置いたもんだあね。さうして寝てえると、小さな太鼓打ちの一陣
が俺の頭ん中で太鼓を打つてる様にきこえるだがね。そこで俺がそいつらに怒鳴つてやると、益々ひ
どく打ちやがるぢやねえかね。」(老人は笑つた)「女子たちや司祭をつれて来て、俺を埋めようつてし
たのよ。そして俺のこと斯う云つたのさ、「此の人は俗人だつた。女とふざけただ。自分の靈魂を憂な
しにしてしまつただ。四旬祭(復活祭前四十日間の精進祭)に肉を食べただ。バラライカ弾いただ……
懺悔しな。」つてな。そこで俺あ懺悔し始めたあね。」俺あ罪人ですが。」つてな。

「ところが、その坊さん返事をしねえぢやねえか、そこで俺あまた云つただ。「俺あ罪人ですが。」つ
てな。すると坊さんはバラライカのこと訊き初めただ。「何處にその呪はれた樂器があるか俺に云へ、
そして毀してしまへ。」つてな。しかし俺あ云つただ。「自分で持つて居ません。」つてな。俺あそれを略

乳場の部屋の網の下に匿してあつただあね。俺あ奴等がそれを目つけ出せねえつてこと知つて居ただ
よ。そして奴等あ俺を見放しただよ。で、もうこれつきりのことさ。俺あ何處にバラライカを抱きな
らしたもんだか！……だが、俺が云つたやうに。」と彼はなほつづけた。「俺の云ふことよく氣にとめ
て置きなせえよ。出来るだけ遠く人の塊から離れて居なせえ、さうしなきあ華たれ易いからね。俺あ
お前さまに氣の毒だ、そりや全く氣の毒だ。お前様は飲み方知つて居なさる、だから俺あお前様が好
きだ。それにお前様たちやあ皆砂丘を乗りまはす事が好きだな。そんな人が一人俺等の間にもあつた
つて、其奴あ露西亞が来た男だつたが、小山が何か不思議なものにでも見えるやうに、何暗も馬を
乗り出したものだつたつて。丘が目つかるか早い、直きにその頂まで馬を駛らせたもんだよ。そ
んな風に幾度もくくやつたつて。大變に嬉しさうだつたが。チュチェン人に射たれて死んぢやつたよ。
あゝ！ チュチェン人と來たら、鐵砲に狙を定めさへすりや、そりや上手いんだから。俺よりや上手
いんだから。だが、そんな卑劣な仕方で撃つなんて餘りひでえよ。俺あよくお前様等の仲間を見て
吃驚したよ。何て間拔けなんだらう。」と老人は頭を振りながら叫んだ。「だからお前様は片側に
退いて居て一人になつて居なせえ。俺に云はせりや、そりや一番いゝだよ。いゝかね、さうすりやお
前様が目につかねえつてことだ……だから、きつとさうなせえよ。」

「やあ、有りがたう、左様なら、小父さん！もし神様の御許しがあるなら、復會へるだらう。」とオ

リューニンは起き上つて戸口の方に行きながら云つた。
老人は尙も床の上に坐りつゞけて居た。

「それがお前様の左様ならの仕方かね、馬鹿が！馬鹿が！」彼は叫んだ。「え、まあ、何てえ人間
たちなんだお前様等は！俺等はまる一年も仲善だつたぢやねえか！『左様なら』それでおしまひ
よ！お前様も知つてる通り俺とお前様が好きだ、そしてどんなに名残惜しいか！お前様は寂しい
人だ！寂しい人だ！お前様と俺、みんなは俺等を好かねえ。俺とお前様のこと思つて眠れねえだ
らう、それ程俺あ名残が惜しいだ。歌にもあるやうに、

辛いことだよ、可愛い兄弟

知らぬ濱邊で暮すのは

つてのはお前様のことだよ。』

「ちや、左様なら。」とオリューニンは今一度云つた。

老人は起ち上つて彼に自分の手を與つた。彼はそれを取つて將に立たうとして居た。

「口を、口を貸して呉んなせえ！」

老人はその頑丈な二つの手の間に彼の頭を抱えて、濡れた唇と口髭とで三度彼を接吻した。そし
て涙をおとした。

「俺とお前様が好きだ。左様なら。」

オリューニンは車の中に自分の席をとつた。

「何だね！それがお前様の別れ方かね！何か記念になるもの残しといて呉れねえのかねお父
あん。お前様の鐵砲呉んなせえ！お前様は兎に角二挺も有つてるだから。」と老人は本當に泣き初め
ながら云つた。

オリューニンは自分の鐵砲をとつて彼に與へた。

「何であんな爺にやるんです。」とワアニュシヤは叫んだ。「いけませんよ！この老ほれ爺奴！こ
んな耻知らずの奴等つたらない！」と彼は外套に身を纏つて前の方に席を占めながらつゞけた。

「黙れ、豚奴！」と老人は笑ひながら怒鳴つた。手前は、餘程吝嗇漢だな！」

マリアナが小舎から出て來て馬車に無關心な一瞥を投げた。そして少し頭を下げて復小舎に歸つて
行つた。

「Ja bin」とワアニュシヤは目くばせしながら、そして心から可笑しさうに笑ひながら叫んだ。

「出ろ！」とオリューニンは嚴かに云つた。

「左様なら、お父つあん、左様なら。俺とお前様を忘れやしねえよ。」とイェローシカは叫んだ。

オリューニンは振返つて見た、イェローシカ小父は多分彼自身の事でもあらう、マリアナと話して

居た。そしてこの老人も娘も、彼の方を見なかつた。(完)

カササカ

秋社

大正十二年八月一日印刷
大正十二年八月七日發行



定價金壹圓五拾錢

著者 加藤 一 夫

發行者 神田 豐 穂

印刷者 寺田 國太郎

印刷所 早稻田印刷株式會社

發行所

東京市神田區表神保町十番地
株式會社 秋社
電話東京二四八六一番
電話神田二一三八番

トルストイ名著名集

トルストイの思想を全世界に流布せしめしに就いては、フリー・エーヴ・プレスの効を没すべからず。茲に吾邦曠古の大出版たりしトルストイ全集を完成せし吾社は、茲に江湖の熱心に促されて該全集中の名篇を選出し、茲に極めて簡素低廉の小冊子として頒布す。

10	福永挽歌譯	家庭の幸福	四六版假綴	定價金七拾五錢
9	春秋社譯	民話	四六版假綴	定價金八拾錢
8	飯田敏雄譯	國民傳説	四六版假綴	定價金六拾錢
7	加藤一夫譯	宗教とは何ぞや	四六版假綴	定價金七拾錢
6	木村毅譯	家庭のための物語	四六版假綴	定價金七拾錢
5	春秋社譯	神の國は爾曹の衷にあり	四六版假綴	定價金四拾四錢
4	福永挽歌譯	短篇三種	四六版假綴	定價金七拾錢
3	細田源吉譯	私の懺悔	四六版假綴	定價金四拾五錢
2	木村毅譯	藝術とは何ぞや	四六版假綴	定價金一圓
1	宮島新三郎譯	人生論	四六版假綴	定價金八拾錢

122
61

終